

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.240

2013年5月

平成25年度入学式を挙



目次

●ニュース

平成25年度入学式を挙	3
平成24年度「赤崎賞」授賞式を挙	11
第1回「水田賞」授賞式を挙	12
榎 文彦氏が日本芸術院賞及び恩賜賞を受賞	12
平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる	13
第40回経営協議会を開催	14
グローバル30英語授業法FD研修会を開催	14
弓道場の落成式典を挙	14
名古屋大学オープンレクチャー2013を開催	15

●知の先端

中世日本宗教文化の探究を人文学の先端研究へ	16
阿部 泰郎（大学院文学研究科教授）	

●知の未来へ

細胞がDNA損傷に対応するしくみ	18
金尾 梨絵（環境医学研究所助教）	

●部局ニュース

「アジアの中の日本文化」研究センターの看板上掲式を挙	19
プリンキピア第2版出版300周年記念特別展示を開催	19
国際シンポジウム「人種・エスニシティとアメリカ文学・文化—再検討」を開催	20
研究集会「文化創造の発展とその展開」を開催	20
附属地震火山研究センター2012年度年次報告会を開催	21
環境医学研究所動物慰霊祭を挙	21
第1回次世代モビリティコンペティション表彰式を挙	22
李遠哲博士による講演会「人間社会の持続可能な転換」を開催	22

●新名誉教授のことば

	23
--	----

●名大を表敬訪問された方々

	26
--	----

●新たに締結した学術交流協定

	26
--	----

●構成員を対象とした研修

	26
--	----

●新任部局長等の紹介

	26
--	----

●資料

	30
--	----

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成25年3月16日～4月15日

	33
--	----

●INFORMATION

第54回名大祭を6月6日(木)～9日(日)に開催	36
--------------------------	----

●イベントカレンダー

	37
--	----

●ちょっと名大史

名古屋帝国大学開学記念式	40
--------------	----

平成25年度入学式を挙





平成25年度名古屋大学入学式が、4月5日(金)、豊田講堂において、大学院は午前9時30分から、学部は、文、法、経済、理、医学部を対象に午前11時から、教育、情報文化、工、農学部を対象に午後1時からそれぞれ挙行されました。

今年度の入学生は、大学院2,258名(修士課程及び博士課程前期課程1,663名、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)63名、医学博士課程及び博士課程後期課程532名)及び学部2,230名の計4,488名です。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、濱口総長から、大学院入学生及び学部入学生それぞれに対し、祝辞が述べられました(詳しくは総長

の辞をご覧ください)。

続いて、各研究科長等の紹介があった後、大学院工学研究科博士課程入学生の塚原万由子さん、法学部入学生の高橋健汰さん及び農学部入学生の平出直哉さんが、入学生総代として、入学にあたり、本学の学生としての自分を全うすることを宣誓しました。

また、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎氏(トヨタ自動車株式会社名誉会長)より祝辞をいただきました。

引き続き、名古屋大学混声合唱団が、歓迎の歌を合唱し、名古屋大学交響楽団による「威風堂々」(エルガー作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

式典の後、学部入学生を対象として、学生による「入学祭典」と称したサークル紹介が行われました。様々な

サークルによる趣向を凝らしたステージパフォーマンスに、会場は大いに盛り上がりました。

終了後は、豊田講堂の前庭に詰めかけた大勢の在學生から、部活やサークルの勧誘を受けたり、家族などと晴れやかな表情で記念撮影をしたりする入学生の姿が見られました。

入学式の様子は、経済学部カンファレンスホール及びIB電子情報館大講義室、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ(http://www.nagoya-u.ac.jp/info/20130204_2.html)で視聴することができます。



平成25年度大学院入学式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成



皆さん、名古屋大学大学院へ入学おめでとうございます。名古屋大学大学院は、本日修士課程及び博士課程前期課程1,663名、専門職学位課程63名、医学博士課程及び博士課程後期課程532名、総数2,258名の大学院入学生を迎えました。研究を志し、大学院へ進まれた皆さんに、名古屋大学を代表して心から祝福し、歓迎します。

さて、皆さんの入学された名古屋大学は、その歴史を、明治4(1871)年に開設された尾張藩の仮医学校に遡ります。その後、幾度かの存続の危機を越え、昭和14(1939)年に名古屋帝国大学として創立されました。現在では、9学部・14研究科・3研究所からなる基幹研究大学となりました。仮医学校として出発してから142年、総合大学になってから74年を迎え、中部地区で最も古い総合大学です。さてこの名古屋大学の歴史は、我々に何を語っているのでしょうか。私は、名古屋大学の歴史は、2つの重要な特徴を持つと思います。

まず第1として、名古屋大学は常に中部の発展と共にあった、またあり続けることであります。中部は日本のものづくりの拠点、国際的な産業の集積地であります。愛知県の工業出荷額は34兆円で全国1位、製造業従事者は80万人でこれも全国1位です。この愛知県が全国1位になったのは、昭和52年、1977年の事です。実に36年、皆さんの年齢より長い間、1位を続けています。愛知は正に日本の産業の心臓部であります。その中にある名古屋大学は、常に中部地区の人材育成を担ってきました。本日ご臨席の豊田章一郎全学同窓会長をはじめとして、日本の産業をけん引する方々を名古屋大学は輩出してきました。

名大の第2の特徴は、研究者の育成にあります。名古屋大学は、自由闊達な学風を誇り、豊かな人間性を持つ勇気ある知識人の育成を学術憲章に掲げています。皆さんもご存じのように、2001年に野依良治先生がノーベル化学賞を受賞されておられます。2008年、益川敏英先生

と小林 誠先生がノーベル物理学賞を受賞されました。また、下村 脩先生がノーベル化学賞を受賞されました。4名の先生方の業績は、名古屋大学の自由闊達な学風が生み出したものとも言えます。

さて、今日大学院入学を迎えられた皆さん。皆さんの今の夢は何でしょうか。自立した科学者になる事あるいは社会的に成功を収める事でしょうか。それとも、幸せな生活を実現する事でしょうか。今我々は、大きく価値観が変換する時代に生きています。振り返れば、20世紀の科学は多くの利便性と快適性、長寿と物質的幸福を人類社会にもたらしました。しかし一方で、人類社会は人口爆発や資源枯渇、食糧危機、環境破壊等の深刻な危機を生み出し、我々は、多様なそして地球規模で起きる課題に直面しています。これらの背景のもと、いま日本の大学院教育に、イノベーションを実現できる人材の育成が求められています。文部科学省は、このイノベーションという言葉で、「科学的発見や技術的発明を洞察力と融合し発展させ、新たな社会的価値や経済的価値を生み出す革新」と定義付けています。さて、イノベーションを生み出す人材は、どうしたら育成できるのでしょうか。先ほど皆さんの夢について聞きました。私の今の夢は、名古屋大学の改革を進め、皆さんを、発明力と洞察力を持ち、革新的な価値を創造できるような人材に育てる事にあります。

ではどうしたらよいのか。今何が必要か。まず私が、名大の発展のために大切だと思っている事。それは、大学にとって、伝統に根ざす発展が肝心であるという事です。益川先生や小林先生を育てた自由な発想を支える対等な人間関係、若手研究者の自立を促す研究指導、「自由闊達な学風」こそ、名大の宝だと思います。そしてこの学風を、大学院教育の中に徹底すべきであると考えます。

2つ目に、私が思う事。「若い人材の持つ才能の開花」と「良質の科学」は、多様な価値観と文化の中で生まれる

と考えています。そしてこの、多様な価値観と文化の充実
は、大学の国際化、そして女性研究者の育成に鍵があると
考えています。名古屋大学は、昨年度日本の国立大学の中
で最も多数の女性研究者を採用しています。また、名古屋
大学は、保育所の整備や女性教授の採用を積極的に進めて
います。女性のみなさん、諦めないで研究してください。

大学の国際化について。先ほど述べた名大の文化を、今
の時代の課題として発展させるものとしても、大学の国際
化は大切な課題です。名古屋大学は300を超える海外の大
学・研究機関との間で学術交流協定を結んでいます。法
政国際教育協力研究センター、医学部の Young Leaders
Program、農学国際教育協力研究センターや4課題の博士
課程教育リーディングプログラムなどを通じて、大学院教
育の中で国際的な人材育成を図っています。また大学は、
国際化拠点整備事業（グローバル30）を推進し、秋入学、
全てを英語で指導するプログラムを進めています。近未来
には、名古屋大学生の2割が留学生となります。今、大学
は小さな国際社会なのです。

3つ目、今社会は、持続可能社会を実現する人材、国境
を越えて生きる人材、グローバル人材を求めています。一
方、最近の日本の若者は内向きだ、海外に出かけないと言
われています。私はそうは思わない。我々が皆さんを内向
きにさせていると思います。皆さんが、もっと海外で活躍
できる環境、海外留学を体験し自己研鑽の機会を持てるよ
うな環境を整えるべきだと考えています。リーディングプ
ログラムでは、皆さんの海外体験を支援しています。例え
ば、モンゴルの平原でフィールドリサーチを体験し、ノー
スカロライナ・アンビションキャンプで起業家になる勉強
をする機会を提供しています。試してください。

4つ目。中部の活力を大学の力に、大学の展開力を中部
の活力にできる名古屋大学にしたいと思っています。その
ために、グリーンモビリティ連携研究センター、ナショ
ナルコンポジットセンター、細胞生理学研究センター、医



学部附属病院の臨床研究中核拠点、トランスレーショナル
リサーチ拠点、そして創薬科学研究科等を整備してしまし
た。大学院生の企業でのインターンも整備しています。機
会があれば積極的に参加してください。

私の夢は、名古屋大学を「みんなの憧れる大学」として
発展させていくことにあります。そのために、いま最も大
切なことは、今日入学された皆さんが、世界へ大きく視野
を開き、未来を担う人材として育つことです。「名古屋大
学から Nagoya University へ」、これが私たちの大学改革
の目標であります。英語を磨いてください。そして、海外
へ雄飛してください。

色々申し上げましたが、これからの皆さんの大学院生活
が、生きる実感に満ちた生活であること、自分の才能に目
覚める時代となる事を心より願い、私の本日の祝辞といた
します。ご入学おめでとう。



平成25年度学部入学式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

皆さん、名古屋大学へ入学おめでとうございます。本日にここに、2,230名の皆さんを名古屋大学へ迎えることとなりました。君たちの入学を、心から祝います。

入学にあたり、名古屋大学の歴史を少しお話します。名古屋大学は、歴史を明治4(1871)年に開設された尾張藩の仮医学校に遡ります。その後、幾度かの存続の危機を越えて、昭和14(1939)年に名古屋帝国大学として創立されました。以来、戦後の復興期、大学紛争期、国立大学法人化と、様々の困難を越え、9学部・14研究科・3研究所からなる大学として今日に至ります。仮医学校として出発してから142年、名古屋帝国大学になってから74年を迎える、日本の代表的な基幹研究大学です。

さて、142年にわたる歴史を有する名古屋大学は、2つの重要な特徴を持っています。

まず第1として、名古屋大学は常に中部の発展と共にあり続けたことです。ご存じのように、中部は日本のものづくりの拠点、国際的な産業の集積地であります。愛知県の工業出荷額は34兆円で全国1位、製造業従事者は80万人でこれも全国1位です。この愛知県の工業出荷額が全国1位になったのは、昭和52年、1977年の事です。以来36年にわたって1位を続けています。愛知はまさに日本の産業の心臓部であります。その中にある名古屋大学は、常に中部地区の人材育成を担ってきました。本日ご臨席の、トヨタ自動車を世界一の企業へと育て上げられた豊田章一郎全学同窓会長をはじめとして、日本の産業をけん引する方々を名古屋大学は輩出してきました。また、名古屋大学の研究者には、新しい産業を生み出す画期的な発明をされた先生がみえます。その代表である赤崎 勇先生は、青色発光ダイオード(青色LED)の発明をされた方です。この青色発



光ダイオードは、LEDの中でも最も実現不可能な色だとされてきました。しかし、今では青色発光ダイオードは、例えば交通信号やパソコン、テレビ、携帯など、社会の様々な分野で使われています。先生の発明がなければ、人類社会は全く違う形になっていたでしょう。

名大の第2の特徴は、研究者の育成にあります。2008年、名古屋大学の先輩である益川敏英先生と小林 誠先生がノーベル物理学賞を受賞されました。また、下村 脩先生がノーベル化学賞を受賞されました。3人の先生方に先立ち、2001年には野依良治先生がノーベル化学賞を受賞されておられます。このように、皆さんは素晴らしい先輩を持っています。この歴史を誇りとして、皆さんが、素晴らしい先輩たちに続く人材、新しい価値を生み出す人材に育っていただくこと。それが、今日の入学式にあたって皆さんへの私の心からの願いです。

さて、これらの先生方の業績は、名古屋大学の自由闊達な学風が生み出したものとも言えます。名古屋大学学術憲章に、「自由闊達な学風、豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成」と言う言葉があります。覚えておいてください。これはどんな意味を指すのでしょうか。

まず、このキャンパスの空間にあります。今朝気がついたと思いますが、名古屋大学は大きな門も高い塀もありません。この構造は、言わば垣根のない、自由な空間を象徴しています。また、今皆さんの座っている豊田講堂を見てください。この豊田講堂は、築50年を超える建築ですが、50年たっているとは思えないモダンな建物です。私たち名古屋大学は、常に自由であると共に時代の先端でありたいと、そしてこの豊田講堂とキャンパスが我々の意識の象徴であると、私は思います。皆さんはどう思うのでしょうか。

さて、益川先生と小林先生は共に、坂田先生の教えを受けています。戦後間もなくの、厳しい環境の中で、坂田先生は素晴らしい人材育成をなされた。先生の教育の根幹は、学生と指導者が対等の関係で議論すること「学問の前には、みんな平等である事」にありました。この対等な関係で真剣に議論を行うこと、これが自由闊達という言葉の示す精神だと思います。今人類は、人口爆発、食糧危機、環境破壊等解決困難な様々の問題に直面しています。皆さんが、これらの問題について、自分なりにしっかり考え、真剣に議論し、解決策を見いだせる人材になっていただきたい、これが私の2つ目の願いです。

もう1点、大学の国際化について触れます。近年、秋入学が話題になっています。名古屋大学は、既に3年前から、秋入学ですべての授業を英語で行うグローバル30と言うプログラムを始め、世界中から優秀な学生が集まっています。また、博士課程教育リーディングプログラムを4プログラム獲得し、皆さんの先輩大学院生が、積極的に海外で学べる環境を整えています。昨年11月1日現在、名古屋大学は、87の国と地域から1,799名にのぼる留学生を受け入れています。また、現在、328の大学・研究機関との間で学術交流協定を結びつつ、国際学術コンソーシアム21 (AC21) を組織し、特色ある人材育成を国際的に展開しています。

これらの実績は大切ですが、国際化が本学にとって最も重要な課題である理由があります。それは何か。君達名大生の出身です。今朝、自宅から名大に来た人、手を挙げてみてください。名大生は、その70%が東海4県の出身です。この点から見ると、名古屋大学は大きな地方大学に見えます。しかし一方で、君達の卒業後の就職は大半が国際的な



企業であり、君たちは、将来国際的な場で勇気と判断力を示すことのできる人材に育つ事を求められています。

TOEFL-ITP 試験をもう受けられたでしょう。結果でクラス分けをしますが、survival courseの方は必死で頑張ってください。英語力の大きく伸びた人は、総長表彰し、高い英語力を持っている人は、1カ月海外留学していただきます。在学中に、海外に出て、孤独の中で、自分の本当の力、語学力、交渉力を試してください。その体験は、きっと君たちの将来を助けるものとなります。英語のほか、中国語、ドイツ語の海外体験もあります。積極的に参加してください。専門に進めば、単位互換で長期に海外留学できる制度もあります。今名古屋大学では、年間、500人を超える学部生が海外に出かけています。「名古屋大学から Nagoya University へ」、これが私たちの大学改革の目標であります。名古屋の文化を持つ国際人になっていただきたい。これが私の3番目の願いです。

色々申し上げましたが、皆さんの学生生活が、多くの出会いと、実り多い体験に満ちることを願って今日の祝辞とさせていただきます。入学おめでとう。



来賓祝辞（大学院入学式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長



ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田でございます。本日は、名古屋大学大学院の入学式にお招きいただきまして、誠に有難うございます。全学同窓会を代表しまして、本日、大学院にご入学されました皆様に心よりお祝いを申し上げます。

私は、戦時中の昭和19年9月に学部に入學しまして、戦後の昭和22年10月に卒業いたしました。その頃、大学院に進む方は、学部の中で特別に優秀な方で、大学に残って勉強し先生になる方が大半でした。ですから、今日の入学式で、これだけ沢山の方が大学院に入學されている現状を知りまして、私にとりまして、大変良い勉強になりました。しかも、皆様は、名古屋大学からだけではなく、他の大学から、あるいは海外から、さらに研究を志し、この名古屋大学大学院に進まれました方が大勢いらっしゃいます。また、大学院全体で学部とあまり人数が変わらないと伺っております、名古屋大学がますます発展していることを実感した次第でございます。

名古屋大学は、先ほど総長も仰いましたように、創立以来、自由闊達な学風を誇り、豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成を学術憲章に掲げております。この学風からは、先ほど紹介がありましたように4人のノーベル賞受賞者をはじめとして、科学、医学、人文、社会科学などの幅広い分野で、世界をリードする多くの研究者の方々を輩出しております。また、中部地区の基幹総合大学として、モノづくり中部、モノづくり日本を担う人材をはじめ、幾多の分野で、幅広く有為な人材を輩出してまいりましたことは、皆様もすでにご承知の通りでございます。しかし、ご承知の通り、日本は、産業・企業だけでなく、大学もグ

ローバルな競争の真っ只中にあるわけでございます。

こうした中、濱口総長が先ほどおっしゃいましたように、「名古屋大学から Nagoya University へ」という濱口プランに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進などをはじめとする大学の国際化を強力に進めておられます。

すでに、アジア地区を中心に世界70カ国以上の国々から留学生の方々がお見えになっていると伺っております。このような留学生の積極的な受け入れをはじめ、海外の大学との連携拡大や海外拠点の整備、そして、日本の学生の国際性を育む「名大ならではの」、特色のある教育プログラムの実践などを精力的に進めていただいております。

さらに、昨年度は、文部科学省の世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）に採択され、この4月1日に、トランスフォーマティブ生命分子研究所が創設されました。海外からの研究者も含めた新進気鋭の研究者が集まるこの研究所で、世界トップレベルの研究成果が創製されることを期待しております、大学の国際競争力の一層の向上に資するものと確信いたしております。

皆様には、決して現状に安住せず、このような名古屋大学の恵まれた環境を自分のものとして十分に活かし、「世界の中の日本」という視点に立って、日本を学び、世界に学ぶ謙虚な姿勢のもとに、大きな夢、高い目標、高い志をもって、新たな発想と行動で、それぞれの研究分野に挑戦していただきたいと思っております。

そうした皆様一人ひとりの姿勢と行動が名古屋大学の国際競争力を高め、世界に開かれた魅力ある大学の創造に繋がっていくことになると思っております。



さて、名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し、昨年設立10周年を迎えました。当時全学同窓会を持っている大学は非常に少なく、名大では、いち早く全学同窓会を設立したわけでございます。その後東大などでも設立されました。

名大の全学同窓会には、すでに、国内には、関東支部、関西支部、そして浜松を中心とした遠州会の3つの支部がございます。また最近では、濱口総長の強いご意向もありまして、海外には、名古屋大学で学ばれた留学生の方々を中心となりまして、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾に加え、昨年12月に11番目の支部としてラオス支部を設立しております。さらに、今年中にインドネシアとミャンマーにも支部を設立する予定でございます。

昨年10月20日のホームカミングデイでは、全ての海外支部の代表者をお招きして、設立10周年をお祝いしました。これらの名古屋大学の留学経験者の方々は、名古屋大学への思いが深く、大変感謝されております。今後名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点といたしまして、これらの同窓会支部との交流を積極的に進めているところでございます。

名古屋大学全学同窓会の準会員でございます皆様にも、今後留学などで、これらの支部と積極的に交流していただき、名古屋大学の国際的なネットワークを是非広げていただきたいと思っております。

先ほど総長が仰いましたように、これからは、イノベーションとグローバル化ということが大切になります。そして、また、世界の発展、平和のために我々も努力していくことが求められていると思っておりますので、そのよう

な視点・姿勢で、皆さんには是非頑張っていただきたいと思っております。

また、先ほども、名古屋大学の学風は自由闊達だと申し上げましたが、総長の本音では、もっと元気を出してほしいということでございますので、是非大学院の皆様が学部の学生も引っ張っていただいき、総合大学としての連携を良くするためにも同窓会をご利用いただきたいと思います。

私ども全学同窓会も、名古屋大学が、研究、教育、社会貢献の各方面で、日本はもとより、世界屈指の国際競争力を持った大学となるように皆様と一緒に活動してまいりたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

最後に、皆様方の学生生活が楽しく、充実したものにりますことを心から祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日は本当におめでとうございました。



来賓祝辞（学部入学式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社社名誉会長

ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田でございます。本日は、名古屋大学の入学式にお招きいただきまして、誠に有難うございます。全学同窓会を代表しまして、本日ご入学されました皆様に、心よりお祝い申し上げます。

さて、今、皆様は、大変フレッシュな気持ちで、この場に集まっておられると思います。私も、先ほどから、緊張の中にも、若さと希望にあふれた皆様のお顔を拝見いたしまして、非常に爽やかな気持ちが致しております。これから新たに大学生活に入られる皆様は、大きな夢や期待を胸に、新しいことにどんどんチャレンジしていこうと思っておられることでしょう。

名古屋大学には、総合大学として、自然科学から社会科学、人文科学まで、いずれも全国トップレベルの教授陣を擁し、充実した魅力ある講座がそろっております。さらに、創立以来、独創性豊かで、自由闊達、清新な学風は、良き伝統として、今日まで脈々と受け継がれてきております。そして現在、濱口総長のリーダーシップの下、「名古屋大学から Nagoya University へ」という濱口プランに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進などをはじめとする大学の国際化を強力に進めておられます。このように名古屋大学は、皆様の期待に十分応えてくれる大学であると確信しております。

皆様も、決して現状に安住することなく、名古屋大学の恵まれた教育環境を自分のものとして十二分に活かし、「世界の中の日本」という視点に立って、常に視野を広く



持ち、高い目標を掲げて行動し、知力、体力、気力の充実を図って行っていただきたいと思っております。とくに、将来の日本を担うリーダーとしての役割が期待されております皆様には、学生生活を通して、高い志や、他に謙虚に学ぶ姿勢、そして思いやりの心といったものの大切さを、しっかりと掴み取っていただきたいと思っております。

さて、名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し、昨年設立10周年を迎えました。すでに、国内には、関東支部、関西支部、及び浜松を中心とした遠州会の3つの支部がございます。

また、海外には、名古屋大学で学ばれた留学生の方々を中心となりまして、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾に加え、昨年12月に11番目の支部としてラオス支部を設立しております。さらに、今年中にインドネシアとミャンマーにも支部を設立する予定でございます。今後名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点として、これらの同窓会支部との交流を積極的に進めているところでございます。

皆様は、今日から名古屋大学全学同窓会の準会員となりますが、皆様にも、今後留学などで、これらの支部と積極的に交流していただき、名古屋大学の国際的なネットワークを是非広げていただきたいと思っております。

私ども全学同窓会も、名古屋大学が、研究、教育、社会貢献の各方面で、日本はもとより、世界屈指の国際競争力を持った大学となるように皆様と一緒に活動してまいりたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

最後に、皆様のこれからの学生生活が楽しく、充実したものになりますことを心から祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日は本当におめでとうございました。



平成24年度「赤崎賞」授賞式を挙



記念撮影

平成24年度「赤崎賞」授賞式が、3月19日(火)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。同賞は、京都賞を受賞された記念として、赤崎 勇本学特別教授から本学に寄贈された寄附金を基に、本学の若手研究者に対して、「学」を中心とした産学官連携を通じた研究開発の重要性和、科学の発展と社会に大きく貢献した赤崎特別教授の偉業を広く伝えることを目的として、平成22年度に設けられた顕彰制度で、今年で第3回目となります。

本学に在籍する当該年度の4月1日時点で35歳以下の学生及び研究者の中から、学術・科学技術分野で将来的な発展や可能性が期待でき、本学の学術・科学技術水準の高さを内外に知らしめることができる研究を行っている方を対象に選考しており、昨年9月から募集を始め、産学官連携推進本部長である松尾副総長らを委員とした赤崎特別顕彰審査委員会で厳正な審査を行いました。11件の個人、団体からの応募があり、慎重な選考の結果、大松亨介工学研究科助教、並びに山本尚人シンクロトン光研究センター助教及び金秀光高等研究院特任助教で組織するスピン偏極電子源グループが選ばれました。

大松助教の研究テーマは「有機イオン対の特性を活かした不斉触媒の創製と高度分子変換反応の開発」で、医薬品等のキラルな化合物の開発、製造に欠かせない不斉配位子・触媒を創製するための新しい概念を提案し、その有用性を実証したことが評価されました。

スピン偏極電子源グループの研究テーマは「超高輝度・高スピン偏極度電子源の開発」で、裏面照射型歪み超格子フォトカソードと高輝度電子銃を新たに開発し、マイクロメートルサイズの電子ビーム生成を可能とすることにより、超高輝度と世界最高スピン偏極度を両立した電子源の開発に成功したことが評価されました。

授賞式では、濱口総長のあいさつの後、松尾副総長から受賞者の発表と講評があり、次いで、赤崎特別教授から受賞者に正賞の表彰状と、副賞の賞金50万円が贈呈されました。

受賞者からは、自分たちの研究が、本学の学術研究のさらなる向上の一端を担うことにより、赤崎特別教授のような功績に少しでも近づけるよう努力を重ねたい旨、受賞の喜びと赤崎特別教授に対する尊敬の念を込めた謝辞がありました。



大松助教への賞状授与の様子



山本助教への賞状授与の様子

第1回「水田賞」授賞式を挙

「水田賞」授賞式が、3月26日(火)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。

同賞は、水田 洋本学名誉教授からの寄附の意志に基づき、人文・社会科学（思想史）の分野で将来の発展が期待できる優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援する目的で今年度から



記念撮影

創設されたものです。慎重な審査の結果、9件の応募の中から、川名雄一郎京都大学白眉センター特定助教が選ばれました。川名特定助教の受賞は、著書「社会体の生理学－J・S・ミルと商業社会の科学」において、ミルの社会学者としての思想の展開についてコンテクスト分析を試み、「歴史的再構成」という方法意識で独創的な思想史研究の遂行に成功したことによるものです。

授賞式は、濱口総長、杉山理事、審査委員、及び水田名誉教授が出席して行われ、総長からは、「今回の受賞を励みに、今後も高い志をもって自らの研究に精進し、我が国の学術研究の発展に貢献していただきたい」旨のあいさつがあり、審査委員である安藤隆穂経済学研究科教授から、受賞者の紹介及び研究テーマについての審査講評がありました。川名特定助教からは、「今回の受賞は、非常に光栄なことであり、今後もますます研究に精進したい」旨の謝辞がありました。

その後、応接室にて、受賞者及び授賞式出席者の懇談が行われ、研究の動機や今後の研究の発展性について、意見交換を行いました。

榎 文彦氏が日本芸術院賞及び恩賜賞を受賞

本学名誉博士である榎 文彦氏が、日本芸術院賞及び恩賜賞を受賞しました。同賞は卓越した芸術作品を制作した者及び芸術の進歩に貢献した者に授与されるもので、榎氏の受賞は、本学の豊田講堂の設計及び改修によるものです。

豊田講堂は、昭和35年にトヨタ自動車工業株式会社（現トヨタ自動車株式会社）から、教育の振興、科学の発展

の一助となることを目的に寄贈されたもので、榎氏により設計された日本を代表するモダニズム建築の1つです。「DOCOMOMO in JAPAN 近代建築100」、「第20回 BELCA賞」等数々の賞を受賞するなど高く評価されており、平成23年には国の登録有形文化財となりました。同講堂は、設計者の存命中に登録有形文化財になった初めてのケースです。



西側からの外観



豊田講堂ホール

平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる

平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定され、本学から13件が選出されました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としており、「科学技術賞（開発部門・研究部門・科学技術振興部門・技術部門・理解増進部門）」・「若手科学者賞」・「創意工夫功労者賞」・「創意工夫育成功労者学校賞」の各賞が設置されています。今回本学からは科学技術賞で6件、若手科学者賞で7件が選出されました。

なお授賞式は、4月16日(火)に文部科学省で執り行われました。

受賞者は以下のとおりです。

科学技術賞

「世界最高レベルの先進複合材料の開発」

石川隆司 工学研究科教授

「超高輝度高スピン偏極低エネルギー電子顕微鏡の研究」

竹田美和 名誉教授・特任教授

(越川孝範大阪電気通信大学教授と共同受賞)

「還元系金属酵素クラスター活性中心の研究」

巽 和行 物質科学国際研究センター特任教授

「高クヌッセン数流れに関する研究」

新美智秀 工学研究科教授

「講演活動等の全国ネットワーク組織による極地科学の理解増進」

國分 征 名誉教授

(川口貞男国立極地研究所名誉教授、渡邊興亞国立極地研究所名誉教授、松原廣司気象業務支援センター調査役、神田啓史国立極地研究所名誉教授・特任教授と共同受賞)

「ものづくり体験による高校生の科学技術及び工学への理解増進」

梅原徳次 工学研究科教授

千田進幸 元全学技術センター技術専門職員

福森 勉 全学技術センター技術専門員

兼子一重 工学研究科助教

(川口一郎愛知県一宮高等学校教諭と共同受賞)

若手科学者賞

「デザイン型ヨウ素触媒を用いる酸化反応の開発に関する研究」

UYANIK MUHAMMET 工学研究科助教

「生後の血管新生および神経新生の分子機構の研究」

榎本 篤 医学系研究科准教授

「科学技術知と社会をつなぐ人材の育成理念から実践までの研究」

齋藤芳子 高等教育研究センター助教

「長期大沈下をする軟弱地盤の簡易判定と将来予測に関する研究」

田代むつみ 工学研究科助教

「酸塩基協奏型高次機能触媒を用いる精密有機合成法の研究」

波多野 学 工学研究科准教授

「セメント系材料の水に起因する体積変化の研究」

丸山一平 環境学研究科准教授

「宇宙天気の基本要素としての放射線帯電子加速機構の研究」

三好由純 太陽地球環境研究所准教授

第40回経営協議会を開催



協議会の様子

第40回経営協議会が、3月21日(木)、鶴舞地区にある鶴友会館において開催されました。会議では、濱口総長からのあいさつの後、平成25年度学内予算、平成25事業年度における長期借入金の借入れ及び償還計画、平成24年度運営費交付金(業務達成基準適用事業)執行状況、人事関係諸制度の見直し、中期目標・中期計画の変更、平成25年度計画、新執行部の職務分担等について、総長、各担当理事及び副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。次いで、次期経営協議会委員、創薬科学研究科博士課程後期課程の設置、教員に対するインセンティブ制度の制定、平成25年度若手育成プログラムの採択結果、平成25年度国際プログラム群学部学生入学試験早期募集の結果、平成24年度入学者選抜実施状況について報告が行われました。

外部委員の方々からは、平成25年度の学内予算、新執行部の職務分担等、今後の大学院創薬科学研究科に関するあり方に関して貴重な意見が寄せられました。

グローバル30英語授業法 FD 研修会を開催



全体レクチャーの様子

グローバル30(G30)英語授業法FD(Faculty Development: 教員の教育能力開発)研修会が、3月16日(土)、17日(日)の両日、理学南館大講堂などにおいて開催されました。

同研修会は、本学が代表となり、東北大学及び筑波大学との連携のもと、大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業(G30)の一環として開催されたもので、米国のオレゴン大学から授業法に関する専門家4名を講師として招へいし、全体レクチャー、グループ別レクチャー、模擬授業及び授業評価を行いました。

G30教員のほか、今後英語による授業を実施しようとする教員も参加し、本学をはじめとして、東北大、筑波大、慶應義塾大、静岡大、岐阜大、京都大、大阪大の8大学から47名が集まりました。

今回のワークショップを契機として、G30国際プログラムなど英語授業に関わる教員の授業法の改善が図られることが期待されます。

弓道場の落成式典を挙行



「鳴弦・墓目の儀」を披露する様子

弓道場の落成式典が、4月6日(土)、弓道場において行われました。同式典は、学生福利厚生・課外活動等充実費により弓道場が改修されたことを祝して行われたもので、体育会副会長で学生支援を担当する國枝理事及び多数の同部OB出席のもと、まず、師範とOBらによって、退魔儀礼である「鳴弦・墓目の儀」が披露されました。尾州竹林流という全国でもこの地区でしか伝播されていない流派で、演武者は儀礼用の着物に身を包み、周りが静観する張りつめた雰囲気の中で演武を披露しました。この儀礼では、弦を引き鳴らす音と鎗矢を射だすことにより発する音で弓道場から魔除けをし、今後の弓道場の安寧を願いました。続いて、同部主将が同流派をもとにした体配で「矢渡し」を披露し、最後に現役部員による礼射で式典を終えました。式典に先立ち、3月29日(金)には内覧会が開催され、体育会会長である濱口総長はじめ多数の本学関係者の前で弓道部員による試射が行われました。

名古屋大学オープンレクチャー2013を開催

名古屋大学オープンレクチャー2013が、3月20日(水)、東山キャンパス各施設において開催されました。同レクチャーは、本学の研究者が少人数の講義スタイルで、先端科学技術研究をわかりやすく紹介する場として、昨年度から開催されているものです。

当日は、小雨が降る中、166名の方が理学南館大講堂に



あいさつをする國枝副総長

集まり、まず、國枝副総長からのあいさつと広報室からの大学概要説明が行われました。その後、参加者は各教室に分かれて公開講義を受講しました。1時間20分にわたる講義は、研究室見学や測定器の体験など、講義ごとに特色があり、参加者アンケートでは93%の方が「わかりやすかった」と回答し、89%の方が「理解が深まった」と回答しました。一般の方に研究内容をわかりやすく伝えるというオープンレクチャーの主目的を果たすことができました。

なお、今回開講された講義は、「夢の化学反応にかける学生たちの研究のはなし」(石原一彰工学研究科教授)、「藻類でバイオ燃料をつくるのはなし」(小俣達男生命農学研究科教授)、「放射能汚染土のはなし」(片山新太エコトピア科学研究所教授)、「脳と糖鎖のはなし～糖鎖ってなんだろう?～」(門松健治医学系研究科教授)、「アジアにおける氷河変動のはなし」(坂井亜規子環境学研究科特任助教)、「ナノ世界の魅力 液体膜による潤滑技術のはなし」(張賀東情報科学研究科准教授)、「化学の視点でタンパク質を料理するはなし」(渡辺芳人物質科学国際研究センター教授)の7つでした。

中世日本宗教文化の探究を人文学の先端研究へ —〈人文学アーカイヴス・リサーチ・ネットワーク〉の夢—

阿部 泰郎 大学院文学研究科教授

祭りが好き。厳かな儀式から、一転して華やかな所作と声の響く芸能や狂操する集団の渦、果てた後の充たされた静けさまでを愛してやみません。同時に、その全てが周到に配置された諸次元を組み合せて織りあげられた絵巻物として眺めるのも楽しみ。それは皆、精妙にプログラムされた「世界の書物」そのもの、その柔軟な解釈と運用によって読み出され変奏しつつ再現される世界です。

中世の日本は、宗教の時代であると共に、祝祭に満ちた聖俗の綴れ織りのような世界でした。その世界像を〈宗教テキスト〉という方法概念を用いて読みとこうとする試みに挑んでいます。言うまでもなく日本は、典籍文書や絵画彫刻から儀礼芸能などの有形無形の多彩な文化遺産が世界でも比類ない密度で伝えられ、しかも今に生きてはたらく希有な地域なのです。

たとえば、東大寺二月堂の修二会（お水取り）が格好の事例でしょう。天平の世に始まり、現在まで「不退の行法」として連綿と継承される悔過の行いは、「生身」の観音を本尊として練行衆が礼拝苦行する儀礼であり、神を迎え祀る火と水の祭典でもあります。それは華厳経など聖典と行法の式次第、そこに読まれる神名帳や過去帳、記録としての日記など、あらゆる位相の「書かれたもの」によって繰り返し営まれる豊饒な宗教空間であり、縁起絵巻から施入奉納される宝物道具までを蓄える記憶の宝蔵（収蔵庫）でもあります。それらの全体を構成する諸次元の位相を分析しつつ、その統合体として二月堂という一箇の世界を在らしめるシステムについては、歴史的な形式変化の過程と機能を働かせる法則を解き明すこと、端的に言えば、これらをすべて〈テキスト〉として読みとくことが可能なのです。そこに、〈テキスト布置の解釈学〉が有効な方法理論として援用されます。

端的に言えば、それは人類の文化の代表的所産です。文字、図像、儀礼の各次元の表象が相互に

〈座標〉を成して創り出され、はたらき合う姿をイメージすることでもあります。興味ふかいことに、仏教の根本概念である三宝（仏・法・僧）は、そのテキストの三次元にそっくり対応しており、ひいては普遍的な宗教の本質に根ざす運動を生みだすところでもあるでしょう。中世日本の宗教文化は、まさにこの〈宗教テキスト〉を統合的に把握するためのこよない領野であり、その座標化を試みることは、決して図式化に陥るのではなく、むしろその変幻きわまりない生成展開の〈指標〉を示すことになるでしょう。

この着想は、文学研究科が獲得した21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築（2002～06）」、続くグローバルCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育（2007～11）」の宗教・思想部門の研究推進者として取り組むうちに育まれました。それは同時に、国内・海外の日本研究に関する人文学諸分野の第一線で活躍する研究者との共同研究のなかで成長したのであり、中間的成果は、国際研究集会「日本における宗教テキストの諸位相と統辞法」において提起し、議論と検討のういで同題の報告書を刊行しました（2009年）。そこでは、中世寺院に伝来したテキストの断片から一冊の書物ひいて一箇の思想体系を復原する試みに始まり、聖典の目録に体系化され、秘密儀礼の過程に生みだされ、あらゆる言語の歌の声に託される、日本宗教が創成した〈聖なるもの〉を神祇や民俗祭祀、そこに象られる尊像や絵解かれる図像まで多面的に読みとこうと企てました。そのために文学、歴史、宗教、思想、美術、民俗等の諸分野の先端研究が結集されたのです。

この探究は、自ら研究代表者をつとめる科研「中世宗教テキストの総合的研究—寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合」（2010～）に至る数次の継続した共同研究がその基盤を成しています。中心的な研究対象は、寺院において形成・伝来した「聖教」と呼ばれる宗教テキストです。京都で

『覚禅鈔』如法尊勝法



は、仁和寺に伝わる御室法親王が十二世紀以来築きあげた「御流」と呼ばれる密教法流の、美しい図像と法親王の自筆本を含むテキスト体系の復原を試みました。名古屋では、国宝『古事記』を伝える大須観音真福寺の調査を続け、その成果は新たな発見に満ちた『真福寺善本叢刊』全24巻(1998～2011)として公刊されました。それは仏教のみならず、神道や歴史・文学に及ぶ中世宗教文化の比類ない文献に満ちており、その成立・伝来を含め、金沢文庫にも匹敵する重要なアーカイブの復原と再発見が進行しています。その中間的な成果を市民に公開すべく、文学研究科が名古屋市博物館と協同して「大須観音展」が開催され(2012～13)、その図録として監修した『大須観音』も刊行できました。この探究による高度な専門学術の成果をわかりやすく社会に発信し、その貴重さを市民に理解していただけるよう努める営みも、宗教テキスト学実践の一面なのです。

一貫して共同研究により推進してきた〈宗教テキスト学〉の、自身による体系化が近著『中世日本の宗教テキスト体系』(2013)です。本書は、方法概念の提示と共に、聖徳太子、寺院経蔵、儀礼と芸能、神祇祭祀の四つの方向から、中世日本の宗教テキストの世界を、聖典・伝記など文字テキスト、尊像・説話画など図像テキスト、儀礼と次第・願文など儀礼テキストの位相に分ち、それらの座標化を試みました。そのうえで、中世宗教を形成する諸位相のテキストを統合する結節点として、舎利という象徴物と文字本尊に焦点化される、宗教テキスト生成の運動の意義を歴史的に位置付けたのです。かくして、〈宗教テキスト〉とは、この測り知れない豊かな世界を読みとるための操作概念仮説ですが、それは既存の学問分野の枠組を越境し、自ずと超領域の人文学創成を試みる実験となったといえましょう。

この〈宗教テキスト〉研究は、研究のための研究という閉ざされた自己完結的システムではありません。それは、大須文庫のように調査の対象となる寺院経蔵をはじめとするアーカイブそのものの底知れぬ価値を解き明かすことで、その遺産を守り後世に伝えるという、人文学に付託された根本的な使命の自覚へと導かれました。同じく人類の知の遺産であり記憶の庫蔵であるところのこれ



『覚禅鈔』の本尊図像と道場荘厳による、密教宗教テキストのイメージ化の試み

らアーカイブスを調査研究する諸分野の研究者と連携し、それぞれの属す組織や立場を超えて情報交流を行えるフォーラムのような場を想い描いています。これを〈人文学アーカイブス・リサーチ・ネットワーク〉構想として呼びかけてみたいのです。近い将来、名古屋大学がこうした理想を共有する次世代の若い人文学研究者たちの集うフォーラムとなれば、〈宗教テキスト学〉の種子もそこに花開くことでしょう。

主要著作

- 『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究』共編、勉誠社、1998年
- 『真福寺善本叢刊』第一期・第二期全24巻、共編、臨川書店、1988～2011年
- 『湯屋の皇后 中世の性と聖なるもの』名古屋大学出版会、1998年
- 『聖者の推参 中世の声とヲコなるもの』名古屋大学出版会、2001年
- 『中世日本の宗教テキスト体系』名古屋大学出版会、2013年

1953年横浜生れ

和光大学人文学部芸術学科卒業
 大谷大学大学院文学研究科仏教文化専攻博士後期課程単位修得退学
 文学修士
 大阪大学文学部助手、大手前女子大学文学部助教授を経て
 現在、名古屋大学文学研究科教授(比較人文学講座)

*愛することば「ただ、結ばれよ」
 *毎年夏、学生たちと富山城端別院の虫干(むしばし)法会に赴き、聖徳太子絵伝の絵解きを演じている。(実は比較人文学の授業の一環「儀礼とテキスト・フィールドワーク演習」の実習でもあり、宗教テキスト学の社会実践と連携の一端でもある)

あべ やすろう



細胞がDNA損傷に対応するしくみ

私たちの体は60兆個もの細胞で構成されており、細胞一つ一つが全遺伝情報のセット(ゲノム)を保持しています。遺伝情報はDNA上に書き込まれており、ゲノムは約30億塩基対ものDNAからなりますが、細胞内では染色体と呼ばれるコンパクトな構造に収納されています。細胞は元の細胞が二つの細胞に分かれる細胞分裂を繰り返すことにより増殖しています。細胞分裂の際には、染色体が均等に分配されますので、分裂後の細胞が元の細胞と同じゲノムを持つようにするためには、分裂前にあらかじめ染色体(ゲノム)を倍加しておく必要があります(図1)。ゲノムを倍加するとは、30億塩基対のDNA全てを正確にコピー

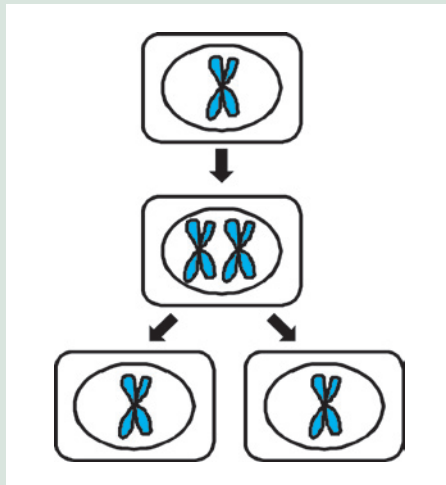


図1 細胞は分裂する前にDNA複製によりゲノムを倍加し、分裂後の細胞が元の細胞と同じゲノムを保持するようにしている

することで、これをDNA複製と呼んでいます。正常な細胞増殖のために、DNA複製は円滑に進行する必要があります。しかし、DNAには紫外線や電離放射線、化学物質や活性酸素など様々な要因により大量にDNA損傷が生じており、DNA上の損傷はDNA複製を阻害してしまいます。DNA複製の阻害は細胞のがん化や老化、細胞死につながる恐れがあるため、細胞にはDNA損傷に対応する様々な機構があります(図2)。ひとつは、DNA修復機構で、名前の通りDNAを損傷のない状態までなおす機構です。様々な種類のDNA損傷に対応するため、細胞は様々なDNA修復機構を獲得してきました。しかしDNA修復機構が働いていても、DNA損傷の量は膨大であり、DNA損傷がDNA複製の阻害になることを完全には防ぐことができません。そのため、DNA損傷があってもDNA複製が止まらないようにする、DNA損傷トレランスと呼ばれる機構があります。通常のDNA複製が止まってしまうDNA損傷部位を「乗り越えて」複製することができる損傷乗り越え複製が、DNA損傷トレランスのひとつとして知られていますが、DNA損傷トレランス機構の詳細は未だにわからない点が多くあります。高等真核生物では特に不明な点が多く、私たちの研究室ではヒト細胞における損傷乗り越え複製を中心としたDNA損傷トレランスの詳細な分子メカニズムの解明を目指して研究を行っています。これにより、細胞の癌化や老化の分子基盤の解明につながるものが期待されます。

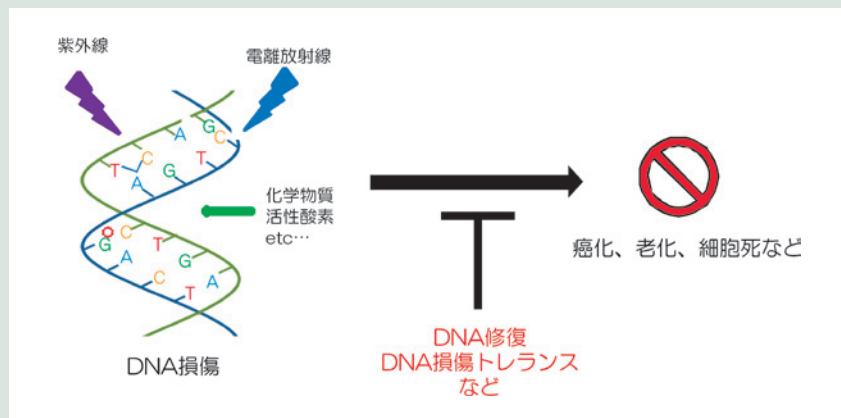


図2 DNA損傷はDNA複製などの阻害の原因となるため、細胞はDNA修復、DNA損傷トレランスなど様々な機構でDNA損傷に対応している。

「アジアの中の日本文化」研究センターの看板上掲式を挙

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、4月4日(木)、文学研究科棟玄関において、4月1日(月)付けで同研究科の附属施設として改組された附属「アジアの中の日本文化」研究センターの看板上掲式を挙りました。

同センターは、平成20年10月に文学研究科の附属施設として設置された日本近現代文化研究センターを発展させた



上掲式の様子(左から、佐久間副研究科長、周藤教授、木俣研究科長、坪井センター長、池内教授、藤木教授)

施設で、日本と東アジアの関係を対象に、この地域が近代以降に経験してきた激動の歴史とそこで育まれてきた豊かな文化的・社会的交流を日本を中心に研究するとともに、将来グローバルに活躍し、今後の日本とアジアの発展の発展に貢献しうる知的判断力に優れた人材を育成することを目的としています。

上掲式には、木俣同研究科長、教育研究評議会評議員である周藤芳幸同研究科教授、佐久間同研究科副研究科長、坪井同センター長、池内 敏同センター教授、藤木秀朗同センター教授及びセンター関係者が列席しました。

初めに、木俣研究科長から、近年より一層重要性が高まっている日本と東アジア地域との関係の発展に貢献することや、日本とアジアの発展の発展に貢献しうる人材を育成すること等が期待されて改組することになった経緯や、グローバルな視点から同センターの目的が達成されることへの期待などが述べられました。続いて坪井センター長から、これまで日本近現代文化研究センターが取り組んできた実績や研究成果について紹介があるとともに、今後の取り組みなどへの抱負が述べられた後、関係者による看板の上掲が行われ、「アジアの中の日本文化」研究センターの今後の発展を祈念しました。

プリンキピア第2版出版300周年記念特別展示を開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、4月3日(水)から12日(金)までの間、2008年ノーベル賞展示室において、プリンキピア第2版出版300周年記念特別展示を開催しました。

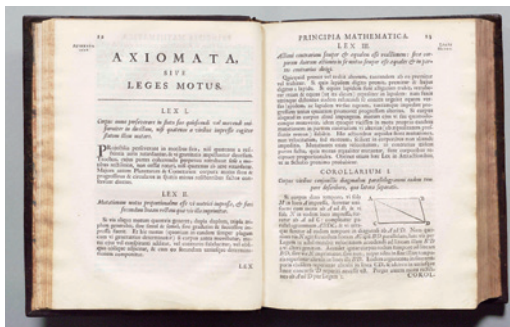
同展示は、本学が所蔵するアイザック・ニュートン著「プリンキピア」第2版が1713年に出版されてから300年を迎えることを記念して開催したもので、理学部の新入生などを中心として、約400名の来場者がありました。2008年ノーベル賞展示室は、2008年にノーベル賞を受賞した益川敏英

本学特別教授、小林 誠同特別教授、下村 脩同特別教授及びそれぞれの恩師である坂田昌一博士、平田義正博士に関する業績も展示しており、偉大な業績に囲まれて貴重な資料に触れられる機会となりました。今後は、名大祭、オープンキャンパス、ホームカミングデイで特別展示を行い、各回で写真パネルを用いた中身の紹介を変えていく予定です。

なお本学には、「ニュートンのリンゴの木」が、2008年の益川・小林両特別教授のノーベル物理学賞受賞を記念し理学南館前に植樹されています。



展示の様子



プリンキピア

国際シンポジウム「人種・エスニシティとアメリカ文学・文化－再検討」を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、3月16日(土)、17日(日)の両日、全学教育棟北棟大講義室において、国際シンポジウム「人種・エスニシティとアメリカ文学・文化－再検討」を開催しました。

初日の午前は、ヴィエット・タン・グエン南カリフォルニア大学准教授が「環太平洋研究－介入と交差」と題し、

罗良功 華中師範大学教授が「『自然とのつながり』－ソーニャ・サンチェスのハイク」と題して、基調講演を行いました。午後には、中部地区及び日本の他地域からの参加者により、アジア系アメリカ文学・文化を題材とする8件の報告が行われました。

2日目の午前は、グエン准教授を講師としてセミナーが行われました。グエン准教授は、ヴェトナム戦争をめぐるアメリカ側、ヴェトナム側双方の記憶のあり方について、種々の記念碑の例を引き合いに出しながら論じ、それをもとに参加者間で活発な議論が行われました。また午後には、アジア系以外の人種・エスニック集団に焦点を当てた文学研究、コミックや音楽といった文学以外のジャンルを対象にした研究の報告が計7件ありました。

35名が参加し、2日間のプログラムを通じて熱心な討議が行われるとともに、21世紀のアメリカ文学・文化研究のあり方をめぐって、有益な意見交換がなされました。



記念撮影

研究集会「文化創造の発展とその展開」を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、3月23日(土)、西尾市岩瀬文庫地下研究ホールにおいて、研究集会「文化創造の発展とその展開－食・戦い・装い、室町から江戸－」を開催しました。

同研究集会は、同研究科の「研究と教育に関するプロジェクト」の一環として毎年企画しているものですが、今

回は、プロジェクトと平行して行われた平成24年度地域貢献事業「過去と未来を繋ぐ地域伝承文化－幸田町の農産物を巡る新たな文化創造」での研究成果も同時に発表しました。また、本学に日本文化学研究の拠点を形成するという将来的な構想にも鑑み、研究会「異類の会」を主催する中央学院大学の伊藤慎吾氏を招き、本学の若手研究者との意見交換も行いました。

「衣・食」から発展した歴史や文学、民俗学研究、さらに擬人化された動植物の図像が使用される「絵入り本」の世界といったテーマを中心に発表が行われ、会場は70名の定員を超え、一般聴衆に加え近隣の大学の若手研究者も多数参加して熱気に溢れる研究集会となりました。

同研究プロジェクトは平成22年度から始めており、岩瀬文庫での研究集会は3度目となります。今回を最終回とする考えでしたが、岩瀬文庫からの要請及び研究集会を支える市民の方の要望にも応えるため、来年度も継続して行うこととなりました。

なお、この研究成果は「アジア遊学」特集号(勉誠出版)として出版する予定です。



発表の様子

附属地震火山研究センター2012年度年次報告会を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科附属地震火山研究センターは、3月19日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて、附属地震火山研究センター2012年度年次報告会を開催しました。

報告会は3部構成で、第1部はセンター構成員の一般発表、第2部は今年度のハイライト研究発表、第3部は2012年度で退職する奥田 隆同センター主席技師及び転出する



会場の様子

中道治久同センター助教の講演が行われ、学外を含め60名の参加者がありました。ホール前ロビーでは、学生を含め4件のポスター発表がありました。

一昨年の東北地方太平洋沖地震発生以降の同センターの地震研究の進展がうかがえる発表が多く行われ、中でも、杉戸信彦同研究科研究員の「変動地形学・古地震学的調査による大阪・河内平野の断層の研究」、橋本千尋同センター准教授の「物理モデルに基づくシミュレーション研究」、寺川寿子同センター助教の「地震メカニズムによる御嶽山周辺の地殻内の流体圧力分布の研究」、田所敬一同センター准教授の「南海トラフの海底地殻変動観測研究」がハイライトとして第2部で報告されました。また第3部では、中道助教から霧島新燃岳2011年噴火活動における火山性微動の解析と今後の研究について、奥田主席技師から同センターの前身である地震予知観測地域センターの時から観測研究の変遷について、講演がありました。

発表タイトルにも表れているとおり、同センターでは、地球物理観測に基づく研究だけでなく、数値シミュレーションから地形調査や古文書調査に至るまで幅広いアプローチで地震や火山研究を行っています。

環境医学研究所動物慰霊祭を挙行

●環境医学研究所

環境医学研究所は、3月22日(金)、同研究所建物外の一画に設けられた慰霊碑において、動物慰霊祭を挙行しました。これは、同研究所が毎年行っているもので、教職員、大学院生等約60名が参列しました。

医学及び生物学系の研究推進にとって、その実証手段として動物実験は欠かせないものですが、同研究所は、東山



献花された慰霊碑

キャンパスで唯一のSPF (Specific Pathogen Free: 特定の病原体を持たない) 実験動物飼育施設を有し、本学の研究推進において重要な役割を担っています。

動物実験の実施にあたっては、動物実験委員会における実験計画内容の厳正な審査を経て、例年90件程度の実験プロジェクトが行われており、その成果は、同研究所内の各分野における研究を通じて、本学の研究に多大な実績をもたらしています。

慰霊祭では、日ごろ研究に供された実験動物に感謝するとともに、その霊を慰めるため、動物実験委員長及び実験動物飼育施設長である佐藤 純同研究所准教授により慰霊の辞が読み上げられ、参列者が次々と慰霊碑に献花を配しました。

第1回次世代モビリティコンペティション表彰式を挙

●グリーンモビリティ連携研究センター

グリーンモビリティ連携研究センターは、4月12日(金)、総長室において、第1回次世代モビリティコンペティション「2050年のモビリティの姿と夢の先」表彰式を挙

行しました。同コンペティションは、本学の学生・教職員を対象に、モビリティと社会、モビリティと人、モビリティによって



記念撮影

変わる暮らし等、私たちの夢となるような新しいアイデアを募集したものです。32件の応募の中から、学生及び教職員の投票による1次審査、濱口総長を委員長とする選考委員会による2次審査を経て、4名の受賞者が決定されました。

表彰式では、初めに総長から賞状と副賞の目録が授与されました。続いて各受賞者より作品の概要と着想に至った背景などが紹介され、審査委員と活発な意見交換が行われました。受賞者は海外研修旅行に参加する予定です。

同センターでは、今回提案された素晴らしいアイデアの実現に向けて、研究開発の推進に取り組んでいく考えです。

夢・最優秀賞

「入れ子構造型モビリティ」

工学研究科博士課程後期課程2年 青木淑恵さん

夢・優秀賞

「次世代型自動制御高速道路」

工学研究科博士課程前期課程1年 東條巧さん

「トモダチ」 理学部2年 松本健太郎さん

「見上げる地球、一つの社会」 工学部4年 阿蘇将也さん

李遠哲博士による講演会「人間社会の持続可能な転換」を開催

●グローバルCOEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」、大学院環境学研究科

グローバルCOEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」及び大学院環境学研究科は、3月21日(木)、環境総合館レクチャーホールにおいて、李遠哲博士による講演会「人間社会の持続可能な転換」を開催しました。

李博士は、現在、国際科学会議(ICSU)の総裁を務めており、高等研究院の名誉院長でもあります。また、台湾



講演する李博士

中央研究院の前院長であり、1986年にはノーベル化学賞を受賞しています。

講演では、人間活動が我々の惑星、地球を変えてしまっており、今世紀には人類の生存が脅威にさらされるかもしれないこと、この苦難を避けるためには、生産・消費、人口増加、人類の足跡を縮小する必要があることを、地球温暖化などに関する具体的な科学的知見をあげながら示しました。さらに、このやりがいのある課題に取り組むべく、既に、社会に向けて解答を出す統合的科学研究が発展してきていること、その一環として、自身が率いているICSUなどが推進を始めた地球環境変化研究の統合的プログラム「Future Earth — research for global sustainability」(仮訳:「未来の地球—グローバルな持続可能性のための研究」計画)が位置付けられることを述べました。人類による改変が著しい地球環境を適正化し、持続可能な地球社会を築くためには、これまでの縦型思考から脱して地球の将来を包括的に考え行動する新しい科学の構築が重要であることを丁寧に説明しました。

参加者は65名で、学外では東京、京都などからも参加があり、講演後、活発な質疑が行われました。



キャンパスの楠は今

杉山 寛行 理事・副総長

1966年に本学に入学以来、学生、教員として本年3月まで東山キャンパスで過ごしてきました。この7年は理事・副総長として、教育・入試・学生支援また総務を担当しました。この間文学研究科に所属していた時には経験することがなかったさまざまなことがらに直面しました。大学評価、組織改革、また入学試験をめぐる問題、リスク管理に関する問題などなど、多くの事柄が心に浮かびます。とりわけ名古屋大学が世界的水準を保持しながらどのように教育・研究を実践できるのか、という問題はなお今後の課題として残されていますが、その論議の過程に参加できたことは幸いでした。大学が教育機関であるなら、学生が生き生きと輝くことが最も重要だと考えますが、そうした現場にも立ち会えたことにも感謝しています。

入学した頃、グリーンベルトに植えられた楠は背丈ほどでした。今では大きく成長し、この間の名古屋大学の発展を象徴しているようです。ただ仔細に観ると、南北の成長が異なっていたり、そもそも樹形の美しい楠が奇妙にねじ曲がって育っていたりします。豊田講堂前に植えられた若い楠の群れがどのように成長していくのか、今後を期待しています。

私は開店休業になっていた研究に何とか復帰をしたいと願っています。



授業分析と教育現象の記述言語の可能性

的場 正美 大学院教育発達科学研究科教授

私の所属していた教育方法学研究室の共同研究は、授業分析と呼ばれる研究です。アメリカやドイツなど諸外国の教授理論を枠組にした研究が主流である中で、授業の詳細な記録を自らも変化する解釈者として分析・解釈するという動的で相対的な立場で授業分析を進めてきました。この研究の中核は、一方で認知理論や教授学の理論における概念と概念の関係を抽出し、他方で授業実践の分析と解釈から授業諸要因の関連構造を導き、そして概念の関連構造と授業諸要因の関連構造を照応し、理論的関連構造を再構成することでした。

しかし、子どもや教師の発言や活動から要因を抽出するには、解釈に飛躍が伴い、不安定であるという問題があり、概念と要因とを同じレベルで比較し再構成することに困難がありました。解釈には飛躍が伴うのは当然ですが、安定して飛

躍するために、教師と子どもの発言と活動そして解釈の過程を記号によって明示化するという研究に着手し、柴田好章准教授そして大学院学生との共同研究として、これまでに45種類の記述言語の形式を開発しました。教育現象を記述する言語を開発する研究は無謀なことかもしれませんが、理論と教育実践を同レベルで論じることができる基礎を形成しているという展望を得たときには胸がどりました。教育現象の記述言語の開発研究は私の在任中には完了しませんでした。次の世代がその研究を継続しています。



奇妙な安堵感

吉田 俊和 大学院教育発達科学研究科教授

三重大学教育学部を経て、1994年の4月に着任してから19年間、全力で走り続けてきました。前任校では、あれだけ楽しんで来た海釣りも、年に1回、大学院生との夏合宿で、出かけるだけになりました。名古屋大学在職中は本当に多忙でしたが、いろいろなことを体験することもできました。現在の学内の駐車システム構築への参画、二度の評議員時代にノーベル化学賞と物理学賞の受賞者が輩出し、学内の祝賀行事に参加できたこと、教育学部附属中等学校の校長を経験できたことなどです。

研究面でも、多くの後輩や指導生と一緒に、自らの関心に基づく「社会的迷惑の心理学」を多角的側面から研究ができたことは、一社会心理学者として幸せでした。また、指導生を育てるには、多くのエネルギーを要しますが、その指導生

が自立して活躍してくれるのを見るのは、この上ない喜びです。幸い、私は多くの指導生に恵まれたので、文系の博士学位の主査を最も多く務めたのではないかと、密かに自負しています。

2004年の法人化以降、国立大学は切磋琢磨して、競争する時代になりました。こうした風潮を批判しているだけでは何も生まれません。名古屋大学が研究大学として輝くためには、学生や大学院生が輝かなくてはなりません。現役の教員は、多様な理想や目標を持つことは自由ですが、学生や大学院生を育てるという大事な原点を忘れずに教育や研究に励んでいただきたいと思います。個人的には、その役割を終えて、奇妙な安堵感を覚えています。



名大人であることの意味

中舎 寛樹 大学院法学研究科教授

定年まで3年を残して名大を去り、明治大学法科大学院へ移ります。法科大学院の設立と同時に赴任し、法科大学院長もさせていただいた9年間でしたが、学生、院生、助手時代を合わせると20数年間、東山キャンパスにいましたので、まさにホーム・ランドでした。これまで帰属意識の低い人間だと自認してきましたが、こうして退職することになると、結局、名大人として生きてきて、これからもそうなのだろうと思います。名大のよさは、自分は自由人で、誰の世話にもならないなどと、ちょっといきがっている者にも、好きなようにやってみると言ってくれる大らかさにあるような気がします。

研究面では、充実していた9年間だったと思います。さまざまな分野の優秀な同僚に恵まれ、いろいろな刺激をもら

環境の中で、積年の自分のもやもやした思いが、しだいにシンプルでクリアなものになっていく気持ちになりました。最終講義には、そのような思いを込めましたので、Web上の「名大の授業」を参照してください。この間の研究成果は、現職の名大教授の立場で出せなかったことは残念ですが、ごく近い将来公にしようと考えています。法科大学院生や研究者志望の院生諸君には、よき友人こそ最良の師である、東の京でも西の京でもない名古屋の人間であること存在意義を考えるといつも言ってきましたが、私自身がまさにそのような生活でした。これからもそうありたいと思っています。



「送る桜」に感謝しつつ…

鈴木 和代 大学院医学系研究科教授

満開の「送る桜」に感謝しつつ、35年間に在籍した名古屋大学をこのたび「卒業」させていただきました。41年前、鶴舞キャンパスの北西角に位置する新築の医学部附属助産婦学校に入学した折、受験会場となっていたいかにも帝国大学らしい医学部外来診療棟が姿を消しており、淋しく思った光景が甦ります。

助産学は性と生殖を対象とした学問です。性行動の範囲は広く、プライベート性が高いのが特徴です。その関係性は、自分を尊重し他人も尊重することが重要であり、人間関係の基本です。これまで、親子を対象にした性教育の実践と研究を通して、妊娠・出産をテーマにすることで母子の自尊感情が高められることを体験してきました。命の誕生はどんな人にとっても原点であり、自分を尊ぶ源になります。その命の

誕生を両手で受け留め、母親や父親に受け渡す役目を持つ助産師を、名古屋大学は明治27年から、一時は途絶えた時期もありながらも、現在もなお養成し続けています。

退職時には記念シンポジウム「多様な性と生と考える」を開催させていただきました。その理由は、参加者一人ひとりが自分のセクシュアリティと向き合う機会になることを期待し、どこにでも10%近く存在するといわれる性的マイノリティの人たちへの人権擁護の必要性を実感したからでした。

多様性を尊重した深い人間愛をそなえた「勇気ある知識人」が名古屋大学からより多く輩出されることと共に、助産師教育の充実・発展を祈願してやみません。



走馬灯のごとく

山本 進一 大学院生命農学研究科教授

4番目の国立大学として平成8年に名古屋大学に赴任して平成23年まで、あしかけ15年教授としてお世話になった。この間、評議員に始まり、農学部長・生命農学研究科長、理事・副学長、総長顧問と約10年間にわたって名古屋大学の運営に関わった。だから、私の名古屋大学での生活は大学運営とともにあったと言っても良さそうで、目を閉じると「走馬灯のごとく」その頃のことが思い起こされる。平野眞一前総長のもとで、21COE、GCOE、技術職員一元化、テニユアトラック、ノーベル賞受賞等が研究担当として、AC21、国際戦略本部、大学間協定、上海事務所等が国際担当として、名古屋大学協会の設立、赤崎記念研究館の竣工等が産学官連携担当として、思い出深い。これらの職務の遂行で、総長補佐や職員の方々に本当にお世話になった。なんとか職務ができた

のもこれらの方々あってのことで、改めて深くお礼申し上げたい。今思うと、ああすれば良かった、こうすれば良かった、と反省することしきりであるが、いずれもそれなりの成果が出ているようなのでご容赦願いたい。

名古屋大学へはもうすっかり尽くしたので定年まで教育・研究三昧と思っていたら、思いもよらず7年を残して岡山大学で再び大学運営を担当する事となった。今後は、外部からと父兄として「自由闊達」な「勇気ある知識人」としてのNagoya Universityのますますの発展を見守りたい。



教育・研究指導で得たこと

高橋 公明 大学院国際開発研究科教授

大学院国際開発研究科に満20年勤務した。そのことによるマイナスは、東アジア海域世界という自分の研究分野において、一周遅れのランナーになったことである。ただし自分の努力でこの差を縮めることは可能である。また、この自覚が63歳で退職を決意したもっとも大きな要因となっている。しかしながら、そのようなマイナスをはるかに凌駕するプラスを得たことも事実である。

基本的条件として挙げなければならないのは、大学院生の背景の多様性である。大学院生の出身国の多様性という面で、当研究科は名古屋大学のなかでおそらくナンバーワンではないのだろうか。もちろん、日本人院生の経歴や関心の多様性も忘れてはならない。演習などでの研究指導、授業のなかでの議論、海外実地研修など現場での共有体験を通じて、

それらの多様な見方、あるいはその背景にある文化に直接触れることができた。

教員の任務あるいは責任というものを考えた場合、指導・助言という用語が頭に浮かぶ。これは、知識であれ、情報であれ、文化の流れとしては教員の側から大学院生の側へ伝えることを暗示しているのであろう。しかしそれらの文化の流れのほとんどは双方向性、さらに、大学院生間の流れも考慮すれば多方向性を備えている。この流れのなかに20年間いることによって、大げさに言えば、私は日本を相対化し、かつ「世界」を理解する鍵をいくつも得たのである。感謝。



名古屋大学での43年間

池上 康男 総合保健体育科学センター教授

学生時代も含めると43年も名古屋大学にお世話になったことになります。学生時代は体育会の水泳部員として、名大の教員となってからは、コーチや部長として水泳部の面倒を見てきました。

私の専門はバイオメカニクスで、スポーツサイエンスの一分野です。理学部の物理を出て、この分野に入ろうとしたきっかけは、指導教官だった宮下先生の動作分析の手伝いをしたことです。その分析の対象がミュンヘンオリンピックの100m平泳ぎで金メダルをとった田口選手でした。自分が分析に関わったことで思い入れもあり、当時は衛星中継のテレビはまだなかったため、深夜にラジオの中継に聞き入っていました。50mの折り返しで田口は7位というアナウンスにこれはダメだと思いました。しかし、後半の75mを過ぎた

辺りで、「田口が出た、田口が出た」とアナウンサーの繰り返しが始まりました。ラジオなので、7位から上に上がっただけなのか、本当にトップに躍り出たのか分からず、はらはらしていましたが、「田口が勝った」の一言でやっと金メダルが取れたと分かり、夜中に一人で祝杯をあげたのを覚えています。これをきっかけに、自分もスポーツサイエンスの世界で何かできるかもしれないと思いました。以来、ずっとスポーツバイオメカニクスの世界で研究や指導をしてきました。私は本当に名古屋大学に育ててもらったのだと思い、感謝しています。



退職にあたって

中村 健治 地球水循環研究センター教授

私は1994年に当時の郵政省通信総合研究所から名古屋大学大気圏科学研究所の共同研究観測プロジェクトセンターに教授として異動しました。当時、故武田喬男先生が共同利用の航空機の導入に尽力されており、私もそのお手伝いをさせて頂きましたが、それは残念ながら実現しませんでした。共同研究観測プロジェクトセンターは共同研究の企画や実行の支援をする組織と位置付けられており、国際共同観測計画の国際事務局の事務局長として働き、毎年の国際プロジェクト会合と隔年の国際研究集会の開催、そしてレターを発しました。振り返ってみるとこれは大きな作業であって、私の周りの若手には大きな負担をかけました。

この頃、私が長年にわたり関与してきた熱帯降雨観測衛星が1997年11月に打ち上げられ、そのデータ解析では大いに楽

しませてもらいました。これにより多くの博士、修士を出すことができました。

改組により2001年4月から地球水循環研究センターとなり延べ6年間センター長を勤めました。国立研究所から大学への異動にあたり、文化の違いを痛感しました。またセンター長となった後は、大学とは何か、などについても運営的な必要から勉強しました。これまで私なりの運営の方向性を持ってきたつもりですが、必ずしも総意には沿っていないと思われれます。

長年にわたり上司、同僚、事務方、支援スタッフそして学生諸君には大変お世話になりました。ここに感謝する次第です。

名大を表敬訪問された方々 [平成25年1月16日～4月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
1月16日	カナダ	マッケンジー・クラグストーン駐日カナダ大使	就任あいさつ
1月17日	サウジアラビア	アルマジュマア大学からタワフィグ・ビン・アブドラ・アルカンハル工学部副部長他3名	工学部・工学研究科との共同研究に関する意見交換
1月21日	ドイツ	ドイツ研究振興協会からジョルグ・シュナイダー国際交流部長他2名	ドイツとの研究交流に関する意見交換
2月6日	ロシア	シベリア連邦大学からヴェルホヴェーツ副学長他1名	法学部及び法政国際教育協力研究センターとの意見交換
2月6日	中国	上海交通大学から許万国国際課長	表敬あいさつ、キャンパスアジア等に関する意見交換
2月22日	タイ	チュラポーン研究所からチュラポーン王女殿下	チュラポーン研究所及びチュラポーン大学院大学との学術交流協定更新調印式
3月4日	中国	同濟大学から陳以一常務副学長(教育/教務担当)他3名	表敬あいさつ及び教務関連部署の視察
3月21日	国際機関	国際科学会議(ICSU)から李遠哲総裁(本学高等研究院名誉院長)	表敬あいさつ及びグローバルCOE特別講演
3月26日	ドイツ	フライブルク大学からハン・ヨヘン・シーヴァー学長、グンタノイハウス副学長(研究担当)他2名	国際化戦略及び各種連携に関する意見交換
4月4日	ベトナム	フエ医科薬科大学からカオ・ノック・タン学長他1名	表敬あいさつ及び学術交流協定に関する意見交換
4月15日	韓国	東亜大学から権五昌総長他2名	表敬あいさつ及び生命農学研究科との意見交換

新たに締結した学術交流協定 [平成25年1月16日～4月15日]

大学間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名
3月14日	ベトナム	ベトナム社会主義共和国司法省

部局間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名	部局名
1月18日	ベトナム	ベトナム科学技術アカデミー数学研究所	大学院多元数理科学研究科
1月30日	米国	コロラド大学ボルダー校大気宇宙物理学研究所	理学部・理学研究科
2月25日	シンガポール	シンガポール国立大学医学部看護学科	医学部
4月6日	台湾	国立中正大学国際交流センター	国際部

構成員を対象とした研修 [平成25年1月16日～4月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
3月8日	教員向けハラスメント防止研修会	教員を対象に、ハラスメントの定義等を確認し、加害者、被害者にならないようにすることを目的とする。	30名
3月14日	大学生向けハラスメント防止講習会	大学院生を対象に、ハラスメントの定義等を確認し、加害者、被害者にならないようにすることを目的とする。	25名

新任部局長等の紹介

●大学院教育発達科学研究科長・教育学部長

松田 武雄
(まつだ たけお)



専門分野：社会・生涯教育学
(略歴)

昭和59年10月 琉球大学教育学部助手
昭和63年1月 琉球大学教育学部講師
平成元年10月 埼玉大学教育学部助教授
平成8年10月 九州大学教育学部助教授
平成10年4月 九州大学大学院人間環境学研究院助教授
平成12年4月 九州大学大学院人間環境学研究院助教授
平成17年4月 九州大学大学院人間環境学研究院教授
平成20年10月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科副研究科長
平成24年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成25年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科長・教育学部長

●教育学部附属中学校・高等学校長

植田 健男
(うえだ たけお)



専門分野：教育経営学領域
(略歴)

昭和59年4月 京都大学教育学部助手
昭和62年4月 大阪経済大学講師
平成2年4月 名古屋大学教育学部助教授
平成12年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授
平成12年11月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授
平成18年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科副研究科長
平成19年4月 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校長
平成22年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科副研究科長
平成22年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成25年4月 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校長
平成25年4月 名古屋大学学生相談総合センター長

新任部局長等の紹介

●情報文化学部長

神保 雅一
(じんぼう まさかず)

専門分野：離散情報数学
(略歴)

昭和51年4月 東京理科大学理工学部助手
昭和62年4月 筑波大学社会学系講師
平成元年4月 岐阜大学工学部助教授
平成5年8月 岐阜大学工学部教授
平成9年4月 慶應義塾大学理工学部教授
平成16年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科教授
平成18年1月 名古屋大学情報文化学部教授
平成21年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成21年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科副研究科長
平成25年4月 名古屋大学情報文化学部長



●医学部附属病院長

石黒 直樹
(いしぐろ なおき)

専門分野：整形外科
(略歴)

昭和63年11月 名古屋大学医学部助手
平成7年4月 名古屋大学医学部附属病院講師
平成12年4月 名古屋大学大学院医学研究科助教授
平成13年12月 名古屋大学大学院医学研究科教授
平成14年4月 名古屋大学大学院医学系研究科教授
平成14年6月 名古屋大学医学部附属病院臨床治験管理センター部長
平成17年5月 名古屋大学医学部附属病院地域医療センター長
平成19年4月 名古屋大学医学部附属病院副病院長
平成20年2月 名古屋大学医学部附属病院臨床研究推進センター部長
平成25年4月 名古屋大学医学部附属病院長



●大学院工学研究科長・工学部長

松下 裕秀
(まつした ゆうしゅう)

専門分野：高分子科学
(略歴)

昭和57年4月 名古屋大学工学部助手
昭和62年8月 名古屋大学工学部講師
平成6年1月 名古屋大学工学部助教授
平成6年7月 東京大学物性研究所助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成16年4月 名古屋大学総長補佐(目標・評価担当)
平成16年10月 名古屋大学評価企画室長
平成19年4月 名古屋大学総合企画室長
平成19年4月 名古屋大学副総長
平成24年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科長
平成25年4月 名古屋大学大学院工学研究科長・工学部長



●大学院多元数理科学研究科長

菅野 浩明
(かんの ひろあき)

専門分野：数理論理学
(略歴)

平成元年4月 日本学術振興会特別研究員
平成3年10月 理論物理国際センター常勤研究員
平成4年7月 ケンブリッジ大学応用数学理論物理学部客員研究員
平成5年9月 広島大学理学部助手
平成8年10月 広島大学理学部講師
平成10年4月 広島大学理学部助教授
平成12年4月 広島大学大学院理学研究科助教授
平成13年4月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科助教授
平成16年4月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科教授
平成17年7月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科副研究科長
平成23年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成25年4月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科長



●大学院国際言語文化研究科長

福田 真人
(ふくだ まひと)

専門分野：比較文学比較文化、医学史
(略歴)

昭和53年4月 株式会社潮文社編集部
昭和62年10月 名古屋大学総合言語センター講師
平成元年2月 名古屋大学総合言語センター助教授
平成3年4月 名古屋大学言語文化部助教授
平成9年10月 名古屋大学言語文化部教授
平成10年4月 名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授
平成25年4月 名古屋大学大学院国際言語文化研究科長



●大学院環境学研究科長

久野 覚
(くの さとる)

専門分野：建築環境・設備
(略歴)

昭和56年4月 日本学術振興会奨励研究員
昭和57年2月 名古屋大学工学部助手
昭和58年4月 名古屋大学工学部講師
昭和60年10月 名古屋大学工学部助教授
平成7年1月 名古屋大学工学部教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成13年4月 名古屋大学大学院環境学研究科教授
平成13年11月 名古屋大学総長補佐(共通教育・教育改革担当)
平成14年4月 名古屋大学大学院環境学研究科長
平成25年4月 名古屋大学大学院環境学研究科長



新任部局長等の紹介

●大学院情報科学研究科長

坂部 俊樹
(さかべ としき)



専門分野：ソフトウェア論
(略歴)

昭和52年4月 名古屋大学工学部助手
昭和60年4月 三重大学工学部助教授
昭和62年4月 名古屋大学工学部助教授
平成5年6月 名古屋大学工学部教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成15年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科教授
平成15年9月 名古屋大学総長補佐 (情報担当)
平成15年12月 名古屋大学情報セキュリティ対策推進室長
平成16年4月 名古屋大学総長補佐 (広報・情報担当)
平成17年8月 名古屋大学総長補佐 (情報担当)
平成18年4月 名古屋大学情報連携統括本部情報戦略室長
平成23年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成23年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科副研究科長
平成25年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科長

●大学院創薬科学研究科長

人見 清隆
(ひとみ きよたか)



専門分野：生物科学
(略歴)

平成元年4月 日本学術振興会特別研究員
平成元年10月 名古屋大学農学部助手
平成7年11月 名古屋大学農学部助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授
平成19年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科准教授
平成24年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成24年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科副研究科長
平成25年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科長

●高等研究院長

安藤 隆穂
(あんどう たかほ)



専門分野：社会思想史・経済学史
(略歴)

昭和54年4月 名古屋大学経済学部助手
昭和57年4月 名城大学非常勤講師
昭和58年11月 名古屋大学経済学部講師
昭和63年2月 名古屋大学経済学部助教授
平成6年3月 名古屋大学経済学部教授
平成11年4月 名古屋大学評議員
平成12年4月 名古屋大学大学院経済学研究科教授
平成22年4月 名古屋大学高等研究院副院長
平成25年4月 名古屋大学高等研究院長

●遺伝子実験施設長

木下 俊則
(きのした としのり)



専門分野：植物生理学
(略歴)

平成6年10月 九州大学理学部教務員
平成11年4月 九州大学大学院理学研究科助手
平成12年4月 九州大学大学院理学研究院助手
平成19年4月 名古屋大学大学院理学研究科准教授
平成22年10月 名古屋大学大学院理学研究科教授
平成25年4月 名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所教授
平成25年4月 名古屋大学遺伝子実験施設長

●物質科学国際研究センター長

阿波賀 邦夫
(あわが くにお)



専門分野：物性化学
(略歴)

昭和63年3月 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所極低温センター助手
平成4年4月 東京大学教養学部助教授
平成8年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授
平成13年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授
平成17年12月 名古屋大学物質科学国際研究センター教授
平成25年4月 名古屋大学物質科学国際研究センター長

●細胞生理学研究センター長

廣明 秀一
(ひろあき ひでかず)



専門分野：構造分子薬理学
(略歴)

平成4年4月 中外製薬株式会社 (日本ロシュ研究所)
平成8年4月 株式会社生物分子工学研究所研究員
平成13年4月 横浜市立大学大学院総合理学研究科助教授
平成19年4月 神戸大学大学院医学研究科特命教授
平成23年5月 名古屋大学大学院理学研究科附属構造生物学研究センター教授
平成24年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学細胞生理学研究センター教授
平成25年4月 名古屋大学細胞生理学研究センター長

新任部局長等の紹介

●地球水循環研究センター長

石坂 丞二
(いしがき じょうじ)



専門分野：環境動態解析
(略歴)

平成元年4月 工業技術院公害資源研究所通商産業技官
平成3年10月 工業技術院資源環境技術総合研究所通商産業技官
平成4年10月 工業技術院資源環境技術総合研究所主任研究官
平成10年7月 長崎大学水産学部教授
平成17年9月 長崎大学環東シナ海海洋環境資源研究センター兼務
平成18年4月 長崎大学学長補佐
平成21年4月 名古屋大学地球水循環研究センター教授
平成25年4月 名古屋大学地球水循環研究センター長

●国際部長

三枝 広人
(さいぐさ ひろひと)



(略歴)

昭和56年4月 東京学芸大学教育学部
昭和62年4月 放送教育開発センター管理部会計課
平成元年10月 文部省高等教育局医学教育課
平成5年4月 文部省高等教育局医学教育課大学院指室病院第二係主任
平成6年4月 文部省高等教育局企画課専門職員
平成8年4月 文部省高等教育局企画課大学設置調査係長
平成9年4月 放送大学学園総務部総務課課長補佐
平成12年4月 東京大学医学部附属病院医事課長
平成14年11月 文部科学省高等教育局留学生課課長補佐
平成16年4月 文部科学省高等教育局学生支援課課長補佐
平成18年4月 文部科学省高等教育局医学教育課課長補佐
平成20年9月 文部科学省大臣官房国際課専門官
平成21年6月 外務省在ニューヨーク日本国総領事館領事
平成24年8月 文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室海外協力官
平成25年4月 名古屋大学国際部長

●大学院環境学研究科事務長

引字 勝美
(ひきじ かつみ)



(略歴)

昭和54年4月 富山医科薬科大学教務部研究協力課
昭和55年11月 名古屋大学医学部附属病院分院
平成2年5月 核融合科学研究所管理部会計課
平成5年2月 核融合科学研究所管理部会計課契約係主任
平成6年4月 名古屋大学経理部管財課第一管財掛主任
平成8年4月 国立乗鞍青年の家庶務課会計係長
平成10年4月 名古屋大学経理部経理課専門職員
平成11年4月 名古屋大学経理部契約室第三契約掛長
平成13年4月 名古屋大学医学部管理課経理掛長
平成14年4月 和歌山工業高等専門学校会計課長
平成15年10月 金沢大学医学部附属病院医事課長
平成18年10月 岐阜大学医学部附属病院総務課長
平成21年4月 名古屋大学工学部・大学院工学研究科経理課長
平成24年4月 名古屋大学研究所経理課長
平成25年4月 名古屋大学大学院環境学研究科事務長

●研究所事務部長

長尾 義則
(ながお よしのり)



(略歴)

昭和50年6月 名古屋大学工学部
平成56年2月 名古屋大学理学部
平成2年5月 名古屋大学入試課
平成4年4月 名古屋大学入試課入学試験掛主任
平成5年5月 名古屋大学学生課総務掛主任
平成8年4月 名古屋大学庶務部庶務課文書広報掛主任
平成9年4月 名古屋大学学務部学務課共通教育室専門職員
平成12年4月 名古屋大学学務部学務課専門職員(教務担当)
平成14年4月 名古屋大学学務部学務課総務掛長
平成16年4月 独立行政法人日本学生支援機構名古屋支部主査
平成17年7月 名古屋大学学務部学務企画課課長補佐
平成21年4月 名古屋大学学務部学生総合支援課長
平成21年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター事務室長
平成23年4月 名古屋大学大学院環境学研究科・地球水循環研究センター事務長
平成25年4月 名古屋大学研究所事務部長

●附属図書館事務部長

酒井 清彦
(さかい きよひこ)



(略歴)

昭和55年4月 横浜国立大学附属図書館整理課
平成60年4月 横浜国立大学附属図書館閲覧課
平成63年4月 学術情報センター事業部目録情報課
平成2年6月 学術情報センター事業部目録情報課雑誌目録情報係長
平成4年4月 学術情報センター事業部目録情報課図書目録情報係長
平成8年5月 学術情報センター事業部目録情報課専門員
平成9年4月 学術情報センター事業部目録情報課課長補佐
平成12年4月 国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課課長補佐
平成14年4月 埼玉大学附属図書館情報サービス課長
平成16年4月 東京大学教養学部等図書課長
平成19年4月 情報・システム研究機構国立情報学研究所企画推進本部ディレクター
平成23年4月 山口大学情報環境部長
平成25年4月 名古屋大学附属図書館事務部長

役員等

総長	濱口 道成
理事（教育・情報関係担当）・副総長	山本 一良
理事（財務・男女共同参画関係担当）・副総長	藤井 良一
理事（総務関係担当）・副総長	鮎京 正訓
理事（研究・学生支援・入試関係担当）・副総長	國枝 秀世
理事（国際・広報・社会連携関係担当）・副総長	渡辺 芳人
理事（人事労務・施設設備・環境安全・事務総括関係担当）・事務局長	竹下 典行
理事（産学連携関係担当（関東地区担当））	横田 昭（学外）†
副総長（評価・総合企画関係担当）	鈴置 保雄
副総長（産学官・病院経営関係担当）	松尾 清一
副総長（法務・リスク管理・人権関係担当）	市橋 克哉

経営協議会委員

学外委員

トヨタ自動車株式会社代表取締役副会長	内山田竹志
学習院大学名誉教授	奥村 洋彦
中部電力株式会社相談役	川口 文夫
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構理事	郷 通子
株式会社中日ドラゴンズ代表取締役社長	坂井 克彦
東レ株式会社代表取締役会長	榊原 定征
名古屋経済大学長	佐々木雄太
日本ガイシ株式会社相談役	柴田 昌治
愛知県病院事業庁長（愛知県がんセンター名誉総長）	二村 雄次
日本アイ・ピー・エム株式会社取締役会長	橋本 孝之

(五十音順)

教育研究評議会評議員

総長	濱口 道成
理事	山本 一良
理事	藤井 良一
理事	鮎京 正訓
文学研究科長	木俣 元一
教育発達科学研究科長	松田 武雄
法学研究科長	定形 衛
経済学研究科長	木村 彰吾
情報文化学部長	神保 雅一
理学研究科長	篠原 久典
医学系研究科長	高橋 雅英
工学研究科長	松下 裕秀
生命農学研究科長	前島 正義
国際開発研究科長	藤川 清史
多元数理科学研究科長	菅野 浩明
国際言語文化研究科長	福田 真人
環境学研究科長	久野 覚
情報科学研究科長	坂部 俊樹
創薬科学研究科長	人見 清隆
環境医学研究所長	澤田 誠
太陽地球環境研究所長	松見 豊

監事	熊田 一充（学外）
監事	浅野 良裕（学外）†
参与	金田 新（学外）†
参与	山田 直（学外）†
参与	伊藤 勝基（学外）†
参与	出村 祥雄（学外）†
参与	小川 宏嗣（学外）†
参与	房村 精一（学外）†
参与	城所 卓雄（学外）†

†印は非常勤

学内委員

総長	濱口 道成
理事	山本 一良
理事	藤井 良一
理事	鮎京 正訓
理事	國枝 秀世
理事	渡辺 芳人
理事	竹下 典行
副総長	鈴置 保雄
副総長	松尾 清一
医学部附属病院長	石黒 直樹

エコトピア科学研究所長	田中 信夫
附属図書館長	佐野 充
医学部附属病院長	石黒 直樹
総合保健体育科学センター長	押田 芳治
文学研究科	周藤 芳幸
教育発達科学研究科	森田美弥子
法学研究科	中東 正文
経済学研究科	根本 二郎
理学研究科	杉山 直
医学系研究科	藤本 豊士
工学研究科	新美 智秀
生命農学研究科	川北 一人
国際開発研究科	成田 克史
多元数理科学研究科	納谷 信
国際言語文化研究科	玉岡賀津雄
環境学研究科	渡邊誠一郎
情報科学研究科	安田 孝美
創薬科学研究科	北村 雅人
教育研究共同施設連合選出	町田 健
教育研究共同施設連合選出	中村 俊夫

総長補佐

教育担当、評価担当	戸田山和久
資産活用担当	家森 信善
研究・教育支援担当	松村 年郎
男女共同参画担当	東村 博子
研究費不正使用防止担当、研究推進担当、総合企画調査担当	藤巻 朗
研究推進担当	渡辺 正実
研究推進担当	門松 健治
入試担当	佐久間淳一
国際化拠点整備担当	遠藤斗志也
国際交流担当	宇田川幸則
広報担当	岩城 奈巳
社会連携・社会貢献担当	宇澤 達
施設整備担当	谷口 元

労働安全担当	村田 静昭
防災担当	鈴木 康弘
評価担当	植村 和正
総合企画調査担当	大屋 雄裕
総合企画調査担当	長谷川好規
総合企画調査担当	岡田 亜弥
産学官連携担当	財満 鎮明
産学官連携担当	齋藤 永宏
産学官連携担当	水野 正明
法務担当	丸山絵美子
人権担当	福澤 直樹
人権（苦情処理）担当	渡部美由紀

部局長等

本部		
事務局	事務局長	竹下 典行
総務部	総務部長	堀内 敦
	総務課長	澤田 利夫
	基金推進主幹	廣川 光之
	人事課長	長谷川靖彦
	人事主幹	上野 哲也
	職員課長	大矢 淳一
	財務部	財務部長
財務課長		廣岡 信行
財務調整主幹		河合 泰和
経理・資産管理課長		市川 真康
契約課長		合田由美子
研究協力部	研究協力部長	横山 正樹
	研究支援課長	加藤 滋
	社会連携課長	富田 博明
国際部	国際部長	三枝 広人
	国際企画課長	野田 昭彦
	国際連携主幹（AO担当）	小崎 光芳
	国際連携主幹	村手 隆司
施設管理部	国際学生交流課長	浅野 国裕
	施設管理部長	西尾 和幸
	施設企画課長	松田 賢
	施設整備課長	青木 浩史
	施設管理課長	袴田 満明
学務部	環境安全支援課長	林 清
	学務部長	一居 利博
	学務企画課長	渡邊 千夏
	教養教育院事務主幹	中瀨 定美
	学生支援課長	社本 庄司
	入試課長	橋 幹宏

運営支援組織	産学官連携推進本部長	松尾 清一
	国際交流協力推進本部長	渡辺 芳人
	情報連携統括本部長	山本 一良
	情報推進部長	櫻井 清隆
	情報推進課長	福田 典正
	情報基盤課長	瀬川 午直
	環境安全衛生推進本部長	竹下 典行
	防災推進本部長	竹下 典行
	施設計画推進室長	谷口 元
	核燃料管理施設長	井口 哲夫
	評価企画室長	鈴置 保雄
	ハラスメント相談センター長	石黒 洋
	社会連携推進室長	宇澤 達
	災害対策室長	飛田 潤
	男女共同参画室長	東村 博子
	法務室長	丸山絵美子
	広報室長	渡辺 芳人
リスク管理室長	市橋 克哉	
総合企画室長	鈴置 保雄	
総合企画室主幹	宮崎 洋介	
研究推進室長	藤巻 朗	
監査室	監査室長	市橋 克哉
	監査室主幹	市岡 浩之
教養教育院	教養教育院長	小野木克明
高等研究院	高等研究院長	安藤 隆徳
	トランスフォーマティブ生命分子研究所長	伊丹健一郎
文学研究科・文学部	文学研究科長・文学部長	木俣 元一
	附属「アジアの中の日本文化」研究センター長	坪井 秀人
教育発達科学研究科・教育学部	教育発達科学研究科長・教育学部長	松田 武雄
	附属中学校長	植田 健男
	附属高等学校長	植田 健男
法学研究科・法学部	法学研究科長・法学部長	定形 衛
	附属法情報研究センター長	増田 知子

経済学研究科・ 経済学部	経済学研究科長・経済学部長	木村 彰吾
	附属国際経済政策研究センター長	家森 信善
文系事務部	事務部長	河本 達吾
	総務課長	樋田 浩和
	経理課長	齋藤 勝行
	教務課長	内出 裕之
情報文化学部	情報文化学部長	神保 雅一
	情報文化学部・情報科学研究科事務長	苗島 実
理学研究科・ 理学部	理学研究科長・理学部長	篠原 久典
	附属臨海実験所長	澤田 均
	附属南半球宇宙観測研究センター長	福井 康雄
	附属構造生物学研究センター長	遠藤 斗志也
	附属タウ・レプトン物理研究センター長	久野 純治
	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長	齊藤 肇
医学系研究科・ 医学部	医学系研究科長・医学部長	高橋 雅英
	附属医学教育研究支援センター長	門松 健治
	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長	高橋 隆
	医学部附属病院長	石黒 直樹
	医学部・医学系研究科事務部長	塩崎 英司
	事務部次長	高下 一磨
	総務課長	曾谷 祐一
	人事労務主幹	坪井 直志
	学務課長	大脇 申子男
	経営企画課長	安田 浩明
	経理課長	堂前 弘樹
	施設管理主幹	佐野 立明
	医事課長	仲井 精一
	医療業務支援課長	武内 松二
大幸地区事務統括課長	山下 啓二	
工学研究科・ 工学部	工学研究科長・工学部長	松下 裕秀
	附属プラズマナノ工学研究センター長	豊田 浩孝
	附属材料バックキャストテクノロジー研究センター長	金武 直幸
	附属計算科学連携教育研究センター長	笹井 理生
	附属複合材工学研究センター長	石川 隆司
	附属マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター長	新井 史人
	工学部・工学研究科事務部長	小林 照夫
	総務課長	塚崎 一彦
	社会連携主幹	高田 義雅
	経理課長	佐田 隆昭
	教務課長	室屋 守男
生命農学研究科・ 農学部	生命農学研究科長・農学部長	前島 正義
	附属フィールド科学教育研究センター長	戸丸 信弘
	附属鳥類バイオサイエンス研究センター長	松田 洋一
	農学部・生命農学研究科事務長	杉浦 良幸
総合保健体育科学センター	総合保健体育科学センター長	押田 芳治
素粒子宇宙起源研究機構	素粒子宇宙起源研究機構長	益川 敏英
国際開発研究科	国際開発研究科長	藤川 清史
多元数理科学研究科	多元数理科学研究科長	菅野 浩明
国際言語文化研究科	国際言語文化研究科長	福田 真人

環境学研究科	環境学研究科長	久野 覚	
	附属地震火山研究センター長	山岡 耕春	
	附属交通・都市国際研究センター長	林 良嗣	
	環境学研究科事務長	引字 勝美	
情報科学研究科	情報科学研究科長	坂部 俊樹	
	附属組込みシステム研究センター長	高田 広章	
創薬科学研究科	創薬科学研究科長	人見 清隆	
	創薬科学研究科・細胞生理学センター事務室長	虎澤 千恵	
環境医学研究所	環境医学研究所長	澤田 誠	
	附属近未来環境シミュレーションセンター長	村田 善晴	
太陽地球環境研究所	太陽地球環境研究所長	松見 豊	
	附属ジオスペース研究センター長	平原 聖文	
エコトピア科学研究所	エコトピア科学研究所長	田中 信夫	
研究所事務部	事務部長	長尾 義則	
	総務課長	伊藤 秀樹	
	経理課長	鈴木 均	
附属図書館	附属図書館長	佐野 充	
	医学部分館長	濱嶋 信之	
	研究開発室長	佐野 充	
	附属図書館事務部長	酒井 清彦	
	課長	高木 昭	
	情報管理課長	高島 学	
	情報サービス課長	岡部 幸祐	
	情報システム課長（事務取扱）	酒井 清彦	
	共同利用・ 共同研究拠点	地球水循環研究センター長	石坂 丞二
		情報基盤センター長	伊藤 義人
学内共同教育研究 施設等	アイソトープ総合センター長	本間 道夫	
	遺伝子実験施設長	木下 俊則	
	留学生センター長	町田 健	
	物質科学国際研究センター長	阿波賀邦夫	
	高等教育研究センター長	早川 義一	
	農学国際教育協力研究センター長	山内 章	
	年代測定総合研究センター長	中村 俊夫	
	博物館長	吉田 英一	
	発達心理精神科学教育研究センター長	松本真理子	
	法政国際教育協力研究センター長	市橋 克哉	
	生物機能開発利用研究センター長	川北 一人	
	シンクロトロン光研究センター長	馬場 嘉信	
	基礎理論研究センター長	野尻 伸一	
現象解析研究センター長	飯嶋 徹		
グリーンモビリティ連携研究センター長	小野木克明		
減災連携研究センター長	福和 伸夫		
細胞生理学研究センター長	廣明 秀一		
大学文書資料室長	池内 敏		
学生相談総合センター長	植田 健男		
全学技術センター	全学技術センター長	藤井 良一	

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
1 技と力：ロボットが拓く④ 本学発ベンチャー企業ファイン・バイオメディカル有限会社の医療用ロボット「EVE」が紹介される	3.16 (土)	日経 (朝刊)
2 TPPへの参加について多和田 眞経済学研究科教授と生源寺眞一生命農学研究科教授が語る	3.16 (土)	中日 (朝刊)
3 田縣神社豊年祭開催：15日 マリア・コルコさん本学大学院生は「母国にはない刺激的な祭りで面白かった」と語る	3.16 (土)	中日 (朝刊)
4 2012年度第2回日本金融学会中部部会開催：9日 経済学部にて	3.16 (土)	中日 (朝刊)
5 きらり中部：「天才プログラマー」お墨付き 名古屋工業大学准教授山本大介氏本学卒業生	3.16 (土)	日経 (夕刊)
6 中部大学准教授深谷圭助氏本学卒業生が辞書引き学習法について解説	3.16 (土)	中日 (朝刊)
7 第5回「HOPE ミーティング」開催：2月26日～3月2日 野依良治本学特別教授と小林 誠同特別教授が参加	3.17 (日)	読売
8 水野正明医学部附属病院教授と堀 勝工学研究科教授はプラズマを照射した培養液が脳腫瘍培養細胞や卵巣がん培養細胞と正常な細胞を選んで殺傷できることを突き止めた	3.18 (月)	中日 (朝刊)
9 現代日本誤百科 (770)：プレーキの「欠陥を改善する」町田 健文学研究科教授	3.18 (月)	中日 (朝刊)
10 鷺谷 威減災連携研究センター教授は東日本大震災後に海岸が隆起しないことについて「海岸の沈降は大地震が起きる前の異常現象にすぎず、それを見ていただけなのかもしれない」と語る	3.18 (月)	朝日 (朝刊)
11 紙つぶて：科学者と芸術家 野依良治本学特別教授	3.18 (月)	中日 (夕刊)
12 なごやか腎臓病教室春季特別講演会開催：31日	3.18 (月)	中日 (夕刊)
13 吉村 崇生命農学研究科教授と新村 毅同研究員のグループはニワトリがコケッコーと鳴く時間は体内時計で管理されていることを解明	3.19 (火)	中日 (朝刊) 他2社
14 本学などの共同研究チームは500キロ電子ボルトの大電流ビームの生成に成功	3.19 (火)	日刊工業
15 濱口総長は学生の採用計画の改定について「後期試験と書類選考などが重なり、学生の負担は大」と語る	3.19 (火)	読売
16 現代日本誤百科 (771)：金に「目をくらませた」町田 健文学研究科教授	3.19 (火)	中日 (朝刊)
17 隈本邦彦減災連携研究センター客員教授が南海トラフで巨大地震が発生した場合の経済被害について解説	3.19 (火)	中日 (朝刊)
18 学生之新聞：編集後記 大崎湖水さん本学大学院生	3.19 (火)	中日 (朝刊)
19 トヨタ自動車株式会社代表取締役副会長内山田志氏本学卒業生の総合科学技術会議での発言が紹介される	3.19 (火)	日経 (朝刊)
20 本学などのチームが千葉県内の病院の入院患者から初めて検出された新しい多剤耐性菌を特定	3.19 (火)	日経 (夕刊)
21 湯川眞希遺伝子実験施設技術補佐員が子育てしながら研究を続けることについて語る	3.19 (火)	中日 (夕刊)
22 博士課程教育リーディングプログラム「フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム」キックオフミーティング開催：11日	3.19 (火)	中日 (朝刊)
23 平成24年度赤崎賞授賞式開催：19日 大松亨介工学研究科助教 山本尚人シンクロトン光研究センター助教と金 秀光高等研究院特任助教のグループが受賞	3.20 (水)	中日 (朝刊)
24 現代日本誤百科 (772)：「地球環境を汚す」町田 健文学研究科教授	3.20 (水)	中日 (朝刊)
25 数理ウェブ開催：23日 大沢健夫多元数理科学研究科教授が「岡理論の遠景」と題して講演	3.20 (水)	中日 (朝刊)
26 2012年度日本芸術院賞・恩賜賞 榎 文彦本学名誉博士	3.20 (水)	中日 (朝刊) 他4社
27 福井康雄理学研究科教授などのグループは巨大な星の集団「スターバースト」は宇宙空間を漂うガス雲の衝突が引き起こしていることを突き止めた	3.20 (水) 3.29 (金)	読売 中日 (朝刊) 毎日 (夕刊)
28 間瀬健二情報科学研究科教授はソフトウェアを開発した人の寝姿を検知するベッドシートについて「このシートに対する介護現場のニーズは非常に高い」と語る	3.20 (水) 3.23 (土)	朝日 (朝刊) 毎日 (夕刊)
29 工学研究科附属プラズマナノ工学研究センターはプラズマなしでシリコン基盤をエッチングする技術を開発	3.21 (木)	日刊工業
30 現代日本誤百科 (773)：「格差社会が広がった」町田 健文学研究科教授	3.21 (木)	中日 (朝刊)
31 重要文化財馬場家住宅研究センターが松本市教育委員会と馬場家住宅の研究に関し連携協力の覚書を交わした	3.21 (木)	中日 (朝刊) 市民タイムス
32 本学と九州大学は線虫を使った実験で記憶を積極的に忘れさせる働きをする神経細胞を突き止めた	3.22 (金)	中日 (朝刊) 日経 (夕刊)
33 公開講座「十八史略―魏晋南北朝―」開催：26日 竹内弘行本学名誉教授が講師を務める	3.22 (金)	毎日 (朝刊)
34 顔：国立天文台名誉教授石黒正人氏本学卒業生	3.22 (金)	読売
35 益川敏英本学特別教授が名古屋市科学館の名誉館長に就任	3.22 (金) 3.23 (土)	中日 (夕刊) 他3社 中日 (朝刊) 読売
36 大地震備えは？：「低すぎる」専門家警鐘 福和伸夫減災連携研究センター教授は「自治体は防災拠点補強の重要性をもっと説明すべき」と語る	3.23 (土)	読売
37 減災まちづくりシンポジウム開催：22日 福和伸夫減災連携研究センター教授は「災害“後”のまちづくりを意識することが犠牲者を減らすことにつながる」と語る	3.23 (土)	中日 (朝刊)
38 本学のプラズマ研究所を母体とする核融合科学研究所の重水素実験計画に土岐、多治見、瑞浪の3市長が連名で岐阜県に同意するよう求める文書を提出	3.23 (土) 3.28 (木)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
39 本学は東京大学、東北大学と共同で酸化ニッケルに線状の欠陥を入れると磁石の性質を持つようになることを発見	3.25 (月)	日刊工業
40 あいちシンクロトロン光センター開所式：22日 豊田章一郎本学全学同窓会長が「シンクロトロン光は夢の光。次世代のモノ作りを切り開く光」と挨拶を述べる	3.25 (月)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
41 紙つづて：創造性を育む 野依良治本学特別教授	3.25 (月)	中日 (夕刊)
42 平成24年度卒業式：25日 濱口総長は「社会が今抱えている困難を越える力は君たち若者の中にある」と挨拶を述べた	3.25 (月)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊)
43 第17回博物館特別展「くじら クジラ 鯨―骨からわかるからだの秘密 そして人とのかわりー」開催：25日～7月20日	3.25 (月) 3.26 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
44 研究現場発：ナショナルコンポジットセンターの創設 石川隆司工学研究科教授	3.26 (火)	中部経済新聞
45 益川敏英本学特別教授が名古屋科学館名誉館長の委嘱状を受け「素粒子論という基礎研究をやってきた私が役に立てれば」あいさつを述べる	3.26 (火) 3.27 (水)	中日 (夕刊) 読売 他2社
46 加藤竜司創薬科学研究科准教授は株式会社ニコンなどと共同でヒト間葉系幹細胞が骨の細胞に分化した度合いを画像から判断し細胞の良否を見分けられる技術を開発	3.27 (水)	日刊工業 中日 (朝刊)
47 現代日本誤百科 (775)：「疫病に殺される」町田 健文学研究科教授	3.27 (水)	中日 (朝刊)
48 野依良治本学特別教授が理化学研究所の理事長に再任された	3.27 (水)	日刊工業
49 第1回水田賞授賞式開催：26日 水田 洋本学名誉教授が「学問のすべての初歩、基本は思想史。歴史を振り返ることが重要」とあいさつを述べる	3.27 (水)	中日 (朝刊)
50 吉田英一博物館教授は博物館が名古屋科学館と相互協力協定を結んだことについて「これを大きなパイプとして、協力を深めたい」とあいさつを述べる	3.27 (水)	中日 (朝刊) 読売
51 後藤百万医学系研究科教授が過活動膀胱について解説	3.27 (水)	中日 (朝刊)
52 丸山彰一医学系研究科准教授と古橋和拓同客員研究者などのグループは脂肪から採取した幹細胞が急速進行性腎炎の治療に効果があることを突き止めた	3.28 (木)	中日 (朝刊)
53 現代日本誤百科 (776)：「地上からの搜索」を再開 町田 健文学研究科教授	3.28 (木)	中日 (朝刊)
54 本学など中部地方の15大学は中部経済連合会会員企業の海外勤務経験者の社員を講師として受け入れる	3.28 (木)	朝日 (朝刊)
55 海外メディア：春名幹国際言語文化研究科客員教授が北朝鮮に対する制裁について解説	3.28 (木)	読売
56 福和伸夫減災連携研究センター教授は活断層について「活断層が近くにあるから直ちに危ないと考えのではなく、施設の重要度にあわせて、適切な対策を取ることが重要だ」と語る	3.29 (金)	読売
57 森川高行環境学研究科教授は名古屋港のクルーズ船誘致について「時間、場所を貨物船とうまく配分しながらクルーズ船を呼び込み、その間にハード面を整備することもできる」と語る	3.29 (金)	朝日 (朝刊)
58 ミクロの探検隊@「ホニウ類の組織を電子顕微鏡で見よう」開催：4月20日	3.29 (金)	中日 (朝刊)
59 特定非営利活動法人先端医療推進機構十周年記念講演会開催：16日 元駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生が講演	3.30 (土)	中日 (朝刊)
60 現代日本誤百科 (777)：乗用車で「男性をひき逃げした」町田 健文学研究科教授	4. 1 (月)	中日 (朝刊)
61 ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや起工式開催：3月27日 松尾清一医学部附属病院長は「がん治療の子どもを支える保護者の療養環境を整え、善意の気持ちに応えたい」と語る	4. 1 (月)	中日 (朝刊)
62 紙つづて：センス・オブ・ワンダー 野依良治本学特別教授	4. 1 (月)	中日 (夕刊)
63 本学は日本政府が今秋からブラジルの理工系留学生を大規模に受け入れる計画を打ち出していることに対し、受け入れ先として手を挙げていると紹介される	4. 1 (月)	日経 (夕刊)
64 間瀬健二情報科学研究科教授などは衣服やシーツそのものにセンサ機能を持たせて呼吸状態や寝姿を把握できるシステムを開発	4. 2 (火)	日刊工業
65 現代日本誤百科 (778)：「ギャンブルに足を踏み込んだ」町田 健文学研究科教授	4. 2 (火)	中日 (朝刊)
66 書籍：「ヒッグス粒子の見つけ方 質量の起源を追う」戸本 誠理学研究科准教授ほか著	4. 2 (火)	中日 (朝刊)
67 博物館コンサート「爽やかな風にのせてーミュージックベルの調べー」開催：27日	4. 2 (火)	中日 (朝刊)
68 現代日本誤百科 (779)：人の「陰口を言う」町田 健文学研究科教授	4. 3 (水)	中日 (朝刊)
69 第29回成田山全国読書大会読売賞 大井千織さん教育学部附属中学校2年生	4. 3 (水)	読売
70 レーザー：野依良治本学特別教授が「女性、若手、外国人の中から優れた人をリーダーに抜擢することが重要だ」と語る	4. 4 (木)	日刊工業
71 現代日本誤百科 (780)：「手術が無事成功」した 町田 健文学研究科教授	4. 4 (木)	中日 (朝刊)
72 ペーパーナイフ：ホテルの光 大場裕一生命農学研究科助教はホテルのさなぎが光ることについて「夜でもこれだけ明るい社会になってしまうと、さなぎの光にはなかなか気付かないかもしれません」と語る	4. 4 (木)	中日 (朝刊)
73 医学部附属病院は退職した女性医師のための復職支援プログラムを開始	4. 4 (木)	中日 (朝刊)
74 名古屋外国語大学長亀山郁夫氏と同副学長杉山寛行本学名誉教授は中日新聞本社を訪れ抱負を語る	4. 4 (木)	中日 (朝刊)
75 医学部附属病院が小児がん拠点病院として紹介される	4. 4 (木)	日経 (夕刊)
76 中部経済活性化シンポジウム Vol.5開催：19日 黒田達朗環境学研究科教授がパネルディスカッションのコーディネーターを務める	4. 4 (木)	日経 (夕刊)
77 5月に本学で開かれる日本栄養・食糧学会で富山短期大学はイカの内臓に肝臓脂質を低下させる成分が含まれている可能性が高いという研究成果を発表する	4. 4 (木) 4. 8 (月)	読売 中日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
78 益川敏英本学特別教授は欧州合同原子核研究所が暗黒物質の証拠となる痕跡を捉えたことについて「宇宙の謎を探る研究は、市民に支えてもらっている」と理解を求め、福井康雄理学研究科教授は「発表はちょっと大げさな感じもする」と語り、伊藤好孝太陽地球環境研究所教授は「今回の発表は、観測結果の第一弾を公表したという意味が強いのでは」と語る	4. 5 (金)	中日 (朝刊)
79 本学が愛知・岐阜両県の国際戦略総合特別区域「アジア No.1航空宇宙産業クラスター形成特区」の指定区域として紹介される	4. 5 (金)	日刊工業
80 平成25年度入学式：5日 濱口総長が「自由な発想を持ち、国際的な問題に解決策を見いだせるようになってほしい」と祝辞を述べる	4. 5 (金)	中日 (夕刊)
81 安全保障問題の歴史的経験をふりかえる：川田 稔本学名誉教授	4. 5 (金)	中日 (夕刊)
82 特集ワイド：「1票の格差」で戦後初の選挙無効判決 広島高等裁判所判事篠津順子氏本学卒業生	4. 5 (金)	毎日 (夕刊)
83 発光言：名古屋大学をアジアの医療ハブにしたい 濱口総長が「大学内に『アジア内視鏡トレーニングセンター』を設立する。アジアにも出先機関を作る計画だ」と語る	4. 6 (土)	日経 (朝刊)
84 鷺谷 威減災連携研究センター教授は巨大地震に「諦め」の気持ちを抱く市民が29%いたことについて「想定は、備えを進めるために公表されている。その想定の意味や公表の意図が間違っていて受け止められてしまっている」と語る	4. 7 (日)	中日 (朝刊)
85 渡辺理事は愛知教育大学、三重大学と共同で留学生の受け入れと派遣の窓口を本学に設置することについて「大学の国際化を進め、この地域から世界で活躍できる人材を送り出したい」と語る	4. 7 (日)	読売
86 現代日本誤百科 (781)：「常識に目を奪われて」失敗する 町田 健文学研究科教授	4. 8 (月)	中日 (朝刊)
87 第31回愛知学生サッカー選手権大会：医学部サッカー部が1-1 (PK3-0) で愛知工業大学に勝利	4. 8 (月)	読売
88 紙つぶて：子どもの心に灯を 野依良治本学特別教授	4. 8 (月)	中日 (夕刊)
89 現代日本誤百科 (782)：「影響が斜陽化」町田 健文学研究科教授	4. 9 (火)	中日 (朝刊)
90 平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞・開発部門 石川隆司工学研究科教授、科学技術賞・研究部門 新美智秀工学研究科教授、巽 和行物質科学国際研究センター特任教授、竹田美和本学名誉教授、科学技術賞・理解増進部門 梅原徳次工学研究科教授、兼子一重同助教、福森 勉全学技術センター技術専門員、元同技術専門員 千田進幸工学研究科技術補佐員、国分 征本学名誉教授、若手科学者賞 榎本 篤医学系研究科准教授、波多野 学工学研究科准教授、丸山一平環境学研究科准教授、三好由純太陽地球環境研究所准教授、UYANIK Muhammet 工学研究科助教、田代むつみ同助教、齋藤芳子高等教育研究センター助教	4. 9 (火)	読売
91 御園座 半世紀の記憶：南山大学教授安田文吉氏本学卒業生	4. 9 (火)	朝日 (朝刊)
92 町田泰則理学研究科特任教授と中部大学の研究グループは植物の葉が左右対称な形になるために重要なたんぱく質を突き止めた	4.10 (水)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
93 現代日本誤百科 (783)：エコに「節電機能を足し算」町田 健文学研究科教授	4.10 (水)	中日 (朝刊)
94 第89回防災アカデミー「心の減災入門－備えあれば心は健康－」開催：24日 松本真理子発達心理精神科学教育研究センター教授が講演	4.10 (水)	読売
95 arts in uni「clas」からのキャンパスアート&デザインツアー開催：8～11日、15～18日	4.10 (水)	朝日 (朝刊)
96 河口信夫工学研究科教授は人工知能研究振興財団などと共同でスマートフォン向けに名古屋駅構内のナビゲーションや店舗検索ができるシステムを構築し、2014年9月にも公開予定	4.11 (木)	日刊工業
97 第22回2012-2013年名古屋駅ロータリークラブ椿賞 柴田理尋アイソトープ総合センター教授	4.11 (木)	中日 (朝刊)
98 中村俊夫年代測定総合研究センター教授は北海道や福井の遺跡から出土した土器が魚を調理した最古の土器の可能性について「土器は何のために作られたのかはよく分かっていなかったがその解明につながるとも面白い研究だ」と語る	4.11 (木)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
99 現代日本誤百科 (784)：美人を見て「にやけた」町田 健文学研究科教授	4.11 (木)	中日 (朝刊)
100 防災の知恵：研修会、マニュアル作成…学生の安全徹底 本学が作成したポケット版の「大震災！行動マニュアル」が取り上げられる	4.11 (木)	読売
101 読売テクノ・フォーラム ゴールド・メダル賞 九州大学准教授井藤 彰氏本学卒業生	4.11 (木)	読売
102 本学が英国の教育専門誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション」によるアジア地域の大学100校のランキングで26位に入る	4.11 (木)	日経 (夕刊)
103 日本科学者会議2013年度東海地区シンポジウム「南海トラフの巨大地震にどう備えるか」開催：20日 本学の研究者などが講演	4.12 (金)	中日 (朝刊)
104 益川敏英本学特別教授、山脇幸一素粒子宇宙起源研究機構特任教授、青木保道基礎理論研究センター准教授らのグループがヒッグス粒子は複数の未知の粒子が結合した「複合粒子」の可能性あることを突き止めた	4.13 (土)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
105 4.21直言！名古屋市長選③：福和伸夫減災連携研究センター教授	4.13 (土)	毎日 (朝刊)
106 アベノミクス現象～教えて～：株式会社共立総合研究所取締役副社長江口 忍氏本学卒業生	4.13 (土)	中日 (朝刊)
107 山岡耕春環境学研究科教授は4月13日に起きた淡路島を震源とする地震について「南海トラフ地震との関係は1つだけでは分からない」と語る	4.14 (日)	朝日 (朝刊)
108 紙つぶて：我に師あり 野依良治本学特別教授	4.15 (月)	中日 (夕刊)

第54回名大祭を6月6日(木)～9日(日)に開催

第54回名大祭が、6月6日(木)～9日(日)に東山キャンパスで行われます。
今年のテーマは「飛びだせしやちほこ ～祭りの空へ～」です。
さまざまな企画を用意して、皆様のご来場をお待ちしております。

開催日程：6月6日(木)～9日(日)

会場：名古屋大学東山キャンパス

最寄駅：市営地下鉄名城線名古屋大学駅

(ご来場の際は公共交通機関をご利用ください)

●講演会企画

「教えて師匠！ 落語から学ぶコミュニケーション」

情報化が進む現代社会において、メールやSNSなど多くのコミュニケーション媒体が使われるようになりました。皆さんはそれらを活用し、自分の考えを相手に伝えられていますか？

日本の伝統文化である落語には、表現力や機知といった、コミュニケーションに必要な要素が多くあります。講演を通じて、現代を生きる私たちが「自分を伝える」力を養うためのヒントが見つかるかもしれません。

講師：名古屋大学理学部卒 落語家 真打
三遊亭圓王氏

日時：6月9日(日)13:00～

場所：IB 電子情報館 中棟2階 IB 大講義室

現在、事前応募受付中です。詳細は「名大祭」で検索の上ご応募下さい。

●環境への取り組み

名大祭では、6月の名大祭当日に先駆けペットボトルキャップの回収を行っています。回収したキャップは、800個で1本のワクチンに交換され、途上国の子どもたちを救うことができます。皆様もご協力をお願いします。

第54回名大祭における食品の取扱いについて

第53回名大祭の模擬店衛生管理体制の見直し・改善・強化を行った上、昨年度同様の店舗数を維持し、より充実した出店者に対する衛生説明会をあわせて実施することで、さらなる万全な模擬店運営システムの確立に名大祭本部実行委員会一同努めております。

皆様に安心して名大祭を楽しんでいただけるよう、千種保健所のご指導の下、模擬店運営を行ってまいりますので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。



●バリアフリーへの取り組み

名大祭では、障がい者、高齢者、妊婦、子ども、子ども連れ、外国人の方も含めたすべての来場者に名大祭を楽しんでもらうために様々な取り組みを実施しています。出来るだけ多くの企画にバリアフリー化にご協力していただき、全ての来場者が安心して名大祭を楽しんでもらえるような取り組みを行っています。また、すべての来場者が不自由なく楽しめるような情報を記載した「バリアフリーマップ」を作成しています。

お問い合わせ

名古屋大学 学生会館内 第7集会室

名大祭本部実行委員会

TEL/FAX 052-789-5178

E-mail mail@meidaisai.com

URL <http://meidaisai.com>

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月25日(月)～7月20日(土)

場 所: 博物館 2階展示室

時 間: 10:00～16:00

休 館 日: 日・月曜日

(6月9日(日)臨時開館)

入 場 料: 無料

第17回博物館特別展

「くじら クジラ 鯨—骨からわかるからだの秘密 そして人とのかかわり—」

内 容: 2009年に名古屋港に漂着したマッコウクジラの骨格標本と制作過程の写真や映像、江戸時代の捕鯨で使われた道具の展示

[関連講演会]

5月28日(火)

場 所: 博物館 3階講義室 時 間: 14:00～15:30

講演題目: 「鯨は六鯨と申し候: 太地における人とクジラの多様な関係」

講 演 者: 櫻井敬人氏 (太地町公民館歴史資料室学芸員)

対 象: 一般

参 加 費: 無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



4月16日(火)～6月14日(金)

場 所: 博物館野外観察園セミナーハウス
2階

時 間: 10:00～16:00

休 館 日: 土・日・祝日

入 場 料: 無料

博物館サテライト展示「三矢保永写真展—空 雲 光—」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



5月22日(水)、5月29日(水)、6月5日(水)

場 所: 三井住友銀行 SMBC パーク栄
(名古屋市中区)

時 間: 18:30～20:00

定 員: 30名

対 象: 中学生以上、一般

参 加 費: 無料

あいちサイエンスフェスティバル2013春のプレ企画

あいち「国際植物の日」月間 植物科学トーク

「さかえサイエンストーク」

講演題目: 「松阪発祥の古典園芸品種に見る花の芸—ナデシコ・菊・花菖蒲—」 (5/22)

講 演 者: 神山康夫氏 (三重大学名誉教授)

講演題目: 「DNAを見ながら野菜を品種改良する」 (5/29)

講 演 者: 松元 哲氏 (農業・食品産業技術総合研究機構野菜茶業研究所上席研究員)

講演題目: 「ゲノムのゴミとされていたもの—イネの動く遺伝子—」 (6/5)

講 演 者: 梶根一夫氏 (自然科学研究機構基礎生物学研究所助教)

[問い合わせ先]

産学官連携推進本部

あいちサイエンスフェスティバル

事務局 052-747-6527

5月25日(土)、6月8日(土)、
6月22日(土)、7月6日(土)

場 所: インキュベーション施設 1階
プレゼンテーションルーム

時 間: 10:00～15:00

ビジネス人材育成センター 平成25年度前期 B 人セミナー

テ ー マ: 「博士の就活スタート・リスタート」

「バイオインフォマティクス外資系企業で博士号を取得して働くという事」 (5/25)

「Job Hunting in English」, 「博士・ポスドクのための就職ガイダンス」 (6/8)

「なぜ、あの人は惚れ惚れするほど、コミュニケーション上手なのか?」 (6/22)

「製造業における、知財戦略と知財部門の業務内容」

「再生医療の現状と今後の展望」 (7/6)

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

5月18日(土)、6月1日(土)、
6月15日(土)、6月22日(土)、
6月29日(土)

場 所: 博物館 3階講義室

時 間: 10:30～12:00

定 員: 80名

(基本的に毎回参加できる人)

対 象: 一般

参 加 費: 無料

名古屋市生涯学習推進センター大学連携キャンパス講座

「達人(研究者)と話そう—光(火)を使う、光で観る—」

講演題目: 「光と人」 (5/18)

講 演 者: 門脇誠二 (博物館助教)

講演題目: 「光のサイエンス 万葉の雲と空の色」 (6/1)

講 演 者: 三矢保永 (本学名誉教授)

講演題目: 「光を操る 偏光と偏光顕微鏡」 (6/15)

講 演 者: 大里 齊氏 (名古屋工業大学プロジェクト教授)

講演題目: 「松明から LED まで」 (6/22)

講 演 者: 澤木直彦 (本学名誉教授)

講演題目: 「光と分子の共同作業」 (6/29)

講 演 者: 富岡秀雄氏 (三重大学名誉教授)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月18日(土)

場 所：豊橋市自然史博物館
(豊橋市大岩町)

時 間：14:00~15:30

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

産学官連携推進本部

あいちサイエンスフェスティバル

事務局 052-747-6527

あいちサイエンスフェスティバル2013春のプレ企画

あいち「国際植物の日」月間 植物科学トーク

「あいちサイエンスコミュニケーション・セミナー第13回」

講演題目：「植物の寄生虫へサイエンスで挑むー“国際植物の日”記念セミナーー」

講演者：後藤デレック氏 (北海道大学准教授)

5月19日(日)、6月2日(日)

定 員：30名

対 象：中学生以上、一般

参 加 費：無料

場 所：名古屋市東山植物園植物会館
(名古屋市千種区) (5/19)
市民四季の森 バラ・アジサイ
まつり会場 (小牧市大草) (6/2)

時 間：10:30~12:00 (5/19)

14:00~15:30 (6/2)

[問い合わせ先]

産学官連携推進本部

あいちサイエンスフェスティバル

事務局 052-747-6527

あいちサイエンスフェスティバル2013春のプレ企画

あいち「国際植物の日」月間 植物科学トーク

「あいちサイエンストーク」

講演題目：「シデコブシの保全を目指して」(5/19)

講演者：戸丸信弘 (生命農学研究科教授)

講演題目：「現代バラのルーツ“中国古代バラ”」(6/2)

講演者：福井博一氏 (岐阜大学教授)

5月21日(火)~9月13日(金)

場 所：附属図書館医学部分館 2階
入口ホール

時 間：9:00~20:00 (平日)
13:00~17:00 (土曜日)

休 館 日：日・祝日、8月15~16日、26~30日、
8月10~9月7日の土曜日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

附属図書館医学部分館第4回ミニ展示会

「珍品・逸品・新収品

ー医学部史料室の最近の収蔵品からー」



5月25日(土)、26日(日)

場 所：博物館 (5/25)、
南知多の海岸 (5/26)

時 間：14:00~16:30 (5/25)、
9:00~16:30 (5/26)

定 員：30名

対 象：小学3年生から中学3年生と
その保護者 (中学生は個人参加可)

参 加 費：1,000円 (保険料)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

名古屋市科学館共催事業

平成25年度第1回地球教室

テ ー マ：「博物館バックヤードと野外で深海の地層と化石を調べよう！」



5月28日(火)、6月18日(火)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール

時 間：18:00~19:30

定 員：120名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

防災アカデミー

[第90回]

講演題目：「防災と地域活性化の美味しいネットワークー地方都市の連携によるー」

講演者：藤村望洋氏 (南三陸復興まちづくり機構専務理事)

内 容：防災まちおこし関連

[第91回]

講演者：桶田 敦氏 (TBS テレビ情報制作局担当局長)

内 容：メディア関連

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月28日(火)

場 所：情報基盤センター4階演習室
時 間：13:00～14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成25年度第2回情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「業務に生かせるゴール指向とは？－要求工学入門－」
講 演 者：山本修一郎（情報戦略室教授）

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

5月31日(金)～6月4日(火)

場 所：チュラロンコン大学、
カセサート大学(タイ・バンコク)
対 象：AC21メンバー大学、開催国タイとタイ
周辺諸国のAC21メンバー大学以外に
在籍する修士レベル以上の大学院生
参 加 費：無料

**AC21国際スクーリング
(AC21 International Graduate Summer School)**

テ ー マ：「Green Science and Technology for a Sustainable Future」
内 容：専門分野において優れた実績を持ち、招待を受けて国際会議やシンポジウムで
基調講演を行うようなトップレベルの研究者が講義行う

[問い合わせ先]

国際部国際企画課 052-789-5684

6月14日(金)

場 所：環境総合館1階レクチャーホール
時 間：14:00～17:00
対 象：関係研究者
参 加 費：無料

**平成24年度活動報告会
減災連携研究センター地域社会減災計画寄附研究部門**

講演題目：「減災計画に関する研究成果や社会連携に関する成果の報告（仮題）」
講 演 者：曾根好徳（減災連携研究センター寄附研究部門教授）、
倉田和己（同寄附研究部門助教）、
山崎雅人（同寄附研究部門助教）

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

6月29日(土)

場 所：博物館2階展示室
時 間：14:00～
参 加 費：無料

博物館落語会「名大博物館で落語を聴こう！」

出 演：桂 九雀氏（落語家）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

7月1日(月)

場 所：国際開発研究科8階
多目的オーデトリウム
時 間：15:00～17:00
対 象：一般
参 加 費：無料

**文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター
セミナー・シリーズ「東アジア関係学に向けて」第2回
講演と朗読・トークの会**

講演題目：「二つの言語の狭間に」
講 演 者：田 原氏（城西国際大学客員教授）

[問い合わせ先]

文学研究科附属
「アジアの中の日本文化」研究センター
教授 坪井秀人 tsuboi@lit.nagoya-u.ac.jp

名大トピックス No.240 平成25年5月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

入学式での部活・サークル
への勧誘の様子
(平成25年4月5日)



133 名古屋帝国大学開学記念式

現在では休業日でなくなったこともあり、ふだん意識することが少なくなりがちですが、5月1日は名古屋大学の創立記念日（名古屋大学記念日）です。ただ、名古屋帝国大学が官制によって設置されたのは、1939(昭和14)年4月1日のことです。

実は、この5月1日は、名帝大医学部の前身である名古屋医科大学が、1931年に設置された日に由来しています。言い換えれば、それまで県立であった愛知医科大学が、初めて官立(国立)大学になった日です。

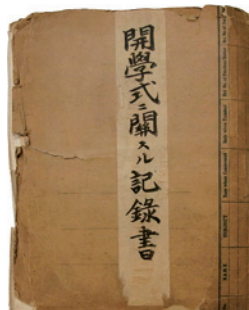
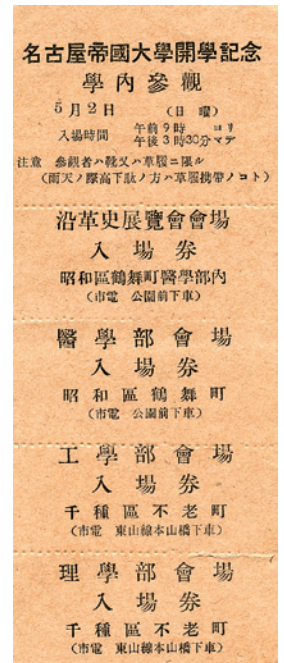
名医大は、5月1日を開学記念日としていましたが、名帝大もその関係を考慮してこの日を創立記念日とし、1940年5月1日に第1回創立記念式を挙行了しました。その後も、毎年この日に創立記念式をおこないましたが、本格的な開学式典は開催していませんでした。

そうしたなか、医学部学生会から寄附があり、その一部を使って、1943年5月1日に開学式を挙行することになり

ました。これには、前年に理工学部が工学部と理学部に分かれて医・工・理の3学部がそろい、さらに1943年3月には、医学部以外の学生を初めて卒業させることができ、総合大学としての体裁が一応整ったという背景もありました。

東山地区で挙行された開学式は、まだ大規模な式典に使えるような講堂などの建物がなく、屋外に設営した天幕の中でおこなわれました。式典には、各界からの来賓約650名と教職員約200名の計約850名が参列しました。また、当日の夜に関係者を招いての晩餐会や、2日、3日には、鶴舞地区で沿革史展や講演会、映画会といった催しもありました。

5月2日には、大学を一般公開する学内参観がおこなわれました。現在のホームカミングデイにつながる、市民に開かれた本学の伝統は、すでに創立時から始まっていたといえるのかもしれませんが。



1	2	3
4	5	

- 1 開学記念式の様子。午前10時開始、開式の辞、国民儀礼、国家斉唱、総長勸語奉読、総長式辞、工事報告、来賓祝辞、勤続者表彰、閉会の辞、という式次第で、11時25分に終了した。式後に500余名による祝賀饗宴があった。
- 2 学内参観で一般公開されている工学部の水力実験室。
- 3 学内参観の入場券。
- 4 『名古屋帝国大学要覧』(大学文書資料室所蔵)。開学式を記念した絵葉書の包み紙の内側に印刷されている。
- 5 『開学式二関スル記録書』(大学文書資料室所蔵)。